

# 明治期風景銅版画をめぐつて

（埼玉を描いた『博覧図』（精行社））

芳賀明子

はじめに

当館に収蔵されている行政文書や古文書の中には、近代の風景や建物を精密に描いた銅版画が含まれている。しかし、これらの銅版画を収蔵検索システムから特定するのは難しい。行政文書の場合は添付資料であるため件名に採られておらず、古文書の場合も書誌事項に銅版画と明示されていないものが多いからである。

そこで、本稿の前半では、平成二十四年度コーナー展示『銅版画にみる近代日本の風景』<sup>①</sup>の調査で明らかになった当館収蔵の銅版画について、主題別に紹介する。また、関連する木版画や石版画、他機関収蔵の作品についても触れていく（表一参照）。

後半では、明治二十年代から三十年代にかけて、関東地方・静岡・長野等を中心に、予約注文により作成された『博覧図』<sup>②</sup>について概観し（表二・三参照）、埼玉が描かれた作品をリストアップする（表四参照）。これらは、当館には数点しか収蔵されていないが、県内市町村史には多数掲載されており、国会図書館等では複製を閲覧できる。<sup>③</sup>また、栃木・静岡・千葉の『博覧図』は、複製版も刊行されている。<sup>④</sup>

本稿の解説やリストが、百年以上前の風景を精密に描いた銅版画を楽しむきっかけとなれば幸いである。

## 一 県内を描いた銅版画

（一）埼玉県行政文書の銅版画（喜多院・陽雲寺・池上神社・調神社等）  
当館が収蔵する戦前期の埼玉県行政文書一、二五九点は、重要文化財に指定されている。その中には、絵図面・青図など、多くの図面類が含まれているが、管見した限りでは、四点の銅版画がある。これらは全て、社寺に関する文書の添付資料である。内容を紹介すると共に、なぜこれらの銅版画が添付されたのかを見ていきたい。

『武州川越仙波喜多院』（図1）（行政文書請求番号（以下請求番号を略す）明二三九四―二九）は、喜多院（現川越市）を描いた明治二十八年（一八九五）八月発行の精行社（青山豊太郎 東京浅草茅町二丁目三番地）製の銅版画で、画工は渡辺広方、彫師は山崎芳翠である。精行社は明治二十年代から三十年代にかけて一連の『博覧図』を発行した印刷所であるが、『博覧図』以外にも、全国の多くの寺社の銅版画を手掛けていた。図には、喜多院住職権大僧正内田亮英や老舗の菓子舗「亀屋」の主人山寄嘉七を始めとする二十名が、銅版寄付者として名を連ねている。

この銅版画は、明治三十七年（一九〇四）七月に、喜多院が沿革碑の建設を申請した際、その位置を正確に示すために、建碑の該当場所

に付箋を貼って添付されたものである。申請が許可されて建設した沿革碑は、今も現存している。銅版画には、水が満ちている東照宮を囲む堀や、古墳の上に建てられている多宝塔など、現在とは異なる喜多院の当時の様子が見て取れる。門前には乗合馬車も走っている。

『武州川越仙波喜多院』の銅版画には、大正四年(一九一五)八月に刊行された「玉塚版」と呼ばれる銅版画もある。これは、東京株式取引所仲買人玉塚栄次郎<sup>5)</sup>が精行社に製作させた原版を寄贈したもので、画工は石田白龍(石田孝友)、彫師は小林桃山である。埼玉県立浦和図書館には版を重ねた大正十一年(一九二二)六月の版(埼玉書庫貴重書 S188セ)が収蔵されている。図中には、「原図銅版寄附 東京市日本橋区本材木町海運橋角 東京株式取引所仲買人 株式会社玉塚商店」と玉塚商店の広告が入っている。

明治中期から大正にかけて、玉塚氏は全国の寺社に「玉塚商店」の名を入れた時計や境内図の銅版原版を寄贈した。『玉塚天保銭翁』(玉塚天保銭翁編纂会 昭和七年(一九三二)刊)によれば、「翁は又著名なる神社仏閣の境内図の原版を作製して、それ等の神社仏閣に寄贈した。寄贈を受けた神社仏閣では此の原版に依り境内図を印刷して、参詣の善男善女の家土産に御札や御守と一緒に売渡して、その利益を基本収入に加へたのである。要するに翁の原版寄贈は、啻に商店の宣伝となりたるのみならず神社仏閣にも非常に好意を喜ばれ、所謂一挙兩得の成功であった。」と、境内図の奉納が玉塚商店の有効な宣伝広告であると共に、寺社側にとっても利益が見込めるものであったことを記している。

前の明治二十八年(一八九五)版と較べると、古墳の上にあった多

宝塔が、道路建設のため、本堂と御殿の渡り廊下の中間に記念塔として移されており、手前には百花園が設けられるなど、その変化が見て取れる。自動車を描かれているのも大正時代を感じさせる。また、この図から、精行社が、大正時代に入っても銅版画を作製し続けており、発行兼印刷者が、青山豊太郎から、発行者秋谷梅之助・印刷者本田精志と替わっていることが知れる。

曹洞宗陽雲寺(現上里町)の境内を描いた「埼玉県賀美郡賀美村陽雲寺之真景」(図2)(行政文書 明二四一四一〇)も精行社製である。柳塘彫とあるが、実はこの「陽雲寺之真景」は、後述する『日本博覧図 第拾編』(明治二十七年(一八九四)精行社刊行)に掲載されている白龍軒呼友石田(石田孝友)写、村上(村上都義)刻の『埼玉県賀美郡賀美村陽雲院之真景』を修正して、兼松柳塘(兼松正義)が再刻したものである。両図を比べると、題名が替わり、扁額や宝蔵が描き加えられているほか、国有林の部分に「風致禁伐官林」の文字が入れられていることが分かる。これは、必要があつて書き加えられたのである。

明治初頭に陽雲寺が上地した国有林は、防風と景觀保護のため禁伐採林となっていたが、明治三十九年(一九〇六)十二月十七日の官報にその売却が公告された。これを受けて、陽雲寺は該林の境内林編入を願ひ、この銅版画は、その添付資料として付されたのである。この図には建物に加えて樹木が精密に描かれているため、該当する林の位置や様子がよくわかり、出願に際して「風致禁伐官林」の文字を加えて再刻したと考えられる。出願の結果、明治四十二年(一九〇九)七月、国有林は、陽雲寺の境内林に編入された。しかし、戦後の農地

解放と台風により、現在ではその大半が失われている。

現上里町の烏川沿いにある延喜式内社池上神社（現上里町）を描いた『埼玉県賀美郡神保原村延喜式今城青坂稲実池上神社』（図3）（行政文書 明二三七六一）も精行社製で、画工石田呼友（石田孝友）が明治二十七年（一八九四）五月上旬に写生し、象童（村上都義）が刻している。この図は、『日本博覧図 第拾編』（明治二十七年（一八九四）精行社刊）に掲載されたもので、「百二十七」と頁が入っている。版画には由来や碑文が添えられており、郷社から県社への昇格願に添付された。出願の結果、池上神社は明治三十二年（一八九九）に県社に昇格している。銅版画にある社殿や石碑、神木や神井は現存しているが、明治以来続いていた「忍保の神楽」が昭和六十年代に途絶えてしまい、現在、建物にはかなり傷みが出ている。

四点目の『延喜式内調神社境内全図』（図4）（行政文書 明二三七二一五）も、調神社（現さいたま市浦和区）の郷社から県社への昇格願いに添付された銅版画である。皆川華岳（皆川欽太郎）が臨写・縮図・彫刻し、明治三十一年（一八九八）十月に成隣館（河野七蔵 東京市下谷区練堀町六十四番地）が発行している。狛犬替わりに置かれた兎の彫刻が有名な調神社だが、この版画で見える限り、まだ兎の彫刻は設置されていない。調神社に加えて、浦和公園、埼玉県庁、裁判所、浦和駅、汽車、郵便局なども描かれている。その後、調神社は明治三十一年（一八九八）に県社へ昇格した。皆川華岳は元々精行社の『博覧図』の彫師であるが、ここでは東京成隣館員と署名し、原画・縮図・彫刻を一人でこなしている。

なお、同時期の行政文書中には次の二点の石版画も含まれているの

で、併せて紹介したい。

一点目は、『大日本埼玉県武蔵国榛沢郡下手計村鹿島神社神木神井之図』（図5）（行政文書 大三〇一三）である。これは、富岡製糸場初代場長尾高惇忠の故郷である下手計村（現深谷市）の鹿島神社を描いた明治二〇年（一八八七）四月の石版画で、識語は尾高惇忠、画は宮廷画師高橋波香がものしている。尾高惇忠は識語の中で、神木の大樺の洞のなかに神水が湧く井戸があることや、明治三年（一八七〇）に、お雇い外国人の仏人ブリューナを案内したことなどを述べている。この樺は、現在、辛うじて根元部分だけが残って保存されている。名勝地調査の回答に添付された石版画である。

二点目は『武州不動ヶ岡不動尊公園設定図』（図6）（行政文書 大一一二五―五―七）である。関東三大不動の一つに数えられ、古くから関東一円の信仰を集めた総願寺（現加須市）は、寺の裏に参詣者のための庭園を設けていた。この図は、大正十年（一九二一）の内務省の公園調査に対する回答に添付されたもので、小泉印刷所（東京浅草北清島町）が印行した着色石版画である。画の左下の円形部分には、天保年間に建造された瓦葺の入母屋造りの不動堂を擁する総願寺の銅版画風の境内図も描かれているが、そこに描かれた堂宇の多くは、今も現存している。寺の裏の公園にも池や小山が残っており、石版画の面影を伝えている。

以上のように、建物・景観・樹木・由来・碑文等が一目で分かる銅版画や石版画は、明治から大正にかけて、出願文書や回答文書の有効な添付資料として使われたのである。

なお、今回採りあげた行政文書内の銅版画や石版画は、全て第一種

文書(永年保存文書)として保存されてきた文書群に含まれていたため、現在まで百年以上保存されてきたが、保存期限が来ると廃棄されてしまう第二種(十年保存)以下の文書に添付されていたものについては、文書自体が廃棄されてしまっているため残っていない。<sup>9)</sup>

(二) 社寺(氷川神社・三峰神社・金鑽神社・広徳寺・聖天院等)

次に、当館に、古文書として収蔵されている県内の社寺を描いた銅版画について紹介し、併せて、他機関収蔵の版画にも触れていきたい。

『官幣大社氷川神社御改造宮壑分間真図』(図7)〔岸田氏収集 七三〇五〕は、氷川神社(現さいたま市大宮区)が明治十四年(一八八一年)七月に刊行した大型の銅版画で、川越氷川神社の宮司山田衛居が原画を描き、玄々堂印刷所が製作したものである。

当時、氷川神社の社殿は老朽化が進み、早急の再建が必要であった。この危機的な状況は、行政文書中に残る明治十二年(一八七九)五月付で宮司平山省齋が提出した「官幣大社氷川神社大破二付御再建御改造願」(明三七一六二)からも知れる。願いは聞き届けられ、明治十三年(一八八〇)、国費による社殿建設が決定し、地鎮祭も行われたが、完成予想図が作成されていなかった。平山は、急遽、川越氷川神社祠官の山田衛居に原画を依頼し、東京の玄々堂に銅版を製作させた。この経緯については、青木忠雄氏が「武蔵一宮氷川神社境内の近世石遺物と石工」『氷川神社の歴史と四季』(大宮郷土史研究会 昭和五十九年(一九八四)刊)の中で明らかにされており、川越氷川神社蔵の山田衛居の『朝日之舎日記』(川越市 昭和五十四年(一九七九)刊)に具体的な記事が残されている。日記には、作成の理由が、「是

ハ内務省へ出シ、又県令モ冀望スル事ノ由。皇華族及國中へ頒布スル事也。」とある。山田は明治十三年(一八八〇)十二月十一日の平山からの書状で原画作製を依頼され、翌十二日に大宮に行き、十三日から描き始め、二十四日には完成させた。その後、平山は、東京の玄々堂に銅版製作を依頼し、翌明治十四年(一八八二)六月四日に刻成をみた。大型の版画には、杉並木の参道を持つ氷川神社の社殿の完成予想図が描かれ、大勢の参詣者も描き込まれている。その後、昭和初期に社殿が建て替えられたため、この画の本社は現存しておらず、当時の氷川神社の様子を彷彿とさせる貴重な図といえる。

氷川神社は、明治元年(一八六八)の天皇の氷川神社行幸についても、明治三十三年(一九〇〇)三月に『武蔵国官幣大社氷川神社行幸之図』(図8)〔西角井家八一八六〕を刊行している。これは、日本画家興宗保祿が絵を描き、兼松正義が刻した行幸風景に、石田呼友(石田孝友)が写生した本殿の画を加えた石版画で、精行社石版部が刊行している。その外、氷川神社については、杉並木の参道と人力車を描いた三代廣重の浮世絵『府県名所図会埼玉県一之宮氷川』(林家一〇三三二)も収蔵されている。

次に、秩父の三峰神社(現秩父市)の版画を紹介する。三峰神社は、江戸時代には観音院高雲寺と称する神仏習合の寺院で、修験の関東総本山として隆盛した。江戸時代の木版には、秩父の彫刻家森玄黄斎(清浄園竹貫)<sup>13)</sup>が写刻した『三峰山全図』(図9)〔河野家一一・木村六二七〕がある。御本社他に、本堂・方丈・護摩堂・開山堂・二王門などが描かれ、女人禁制を刻した石碑も見える。

本堂に安置された十一面観音と、御眷族の大口真神(神犬)を描い

た掛け軸用の『三峰山十一面観音及御眷族図』(小室家 五九七七)も、森玄斎により描かれたものである。三峰を中心とする狼信仰は、秩父地域だけでなく関東を中心に広まり、各地に三峰講が組織され、講員は御札を、盗難・火難除けとして家に貼っていた。

明治の神仏分離に際して寺院を廃した三峰神社は、明治二十一年(一八八八)四月十日に、銅版画『武蔵国秩父郡三峰神社全図』(図10)(田中家 一三五〇)を刊行している。東京芝居の東湊舎巴凌(霜鳥晴)<sup>14)</sup>が写生縮図し、進々堂門人石井義雄が刻した精工組(日本橋区小伝馬町三丁目)の作品で、川喜田松蔵(京橋区本港町十六番地)が出版している。この図については、出版前年の明治二十年(一八八七)の三峰神社の『日鑑』<sup>15)</sup>(県史CH一五五―一〇六)に、注文の様子や画工の滞在記録があるので紹介したい。

〔明治二十年〕八月五日 一、銅版師桑原武吉へ本社絵図面壹万枚注文及候事、本日社降」

〔十月十一日 一、東京浅草須賀町精工組桑原武吉、同組画工霜鳥晴登山〕

〔十月二十日 一、東京銅板画工霜鳥晴社降〕

この記録から、①注文を受けた明治二十年(一八八七)八月五日と十月十一日の時点では、精工組の経営側の人物が桑原武吉であること、②注文が一万枚と大量であったこと、③精工組が浅草須賀町にあったこと、④画工の霜鳥晴(東湊舎巴凌の本名)が写生のため、十日間に亘って三峰山に滞在したことが分かる。しかし、翌二十一年(一八八八)四月の刊行時の著兼発行印刷人は桑原武吉ではなく、川喜田松蔵(京橋区本港町十六番地)に替わっている。また、精工組銅版部の住

所も、浅草須賀町から日本橋区小伝馬町三丁目へと移っており、明治二十年(一八八七)から二十一年(一八八八)の間に、印刷所の場所と経営者が替わったと推定される。

この銅版画には、三峰の名の由来である雲取・白岩・妙法の三山が右上に描かれ、境内の社殿一つ一つが正確に写されている。社殿の名称を江戸時代の境内図と比較すると、神仏分離後、本堂が講堂に、護摩堂が国常立神社に、二王門が神門に名前を変えている。銅版画には、三峰神社が、どのように神仏分離を受容したのが具体的に示されており、興味深い。下部には、参道が始まる贅川宿の白久の一ノ鳥居や、大輪の登龍橋の二ノ鳥居、橋や瀧なども描かれており、画工霜鳥晴の写生旅行は、麓まで含めると、約二週間に及んだと推測される。

また、明治三十八年(一九〇五)には、前述の喜多院同様、東京株式取引所仲買人玉塚栄次郎が原図銅版を寄附した玉塚版『武蔵国県社三峰神社全図』が刊行されている。明治三十八年(一九〇五)七月十五日に出版されたこの図は、秩父宮記念三峯山博物館に所蔵されており、画工は東湊舎巴凌(霜鳥晴)、発行印刷者は精行社代表者秋谷様之助(東京市浅草区茅町二丁目三番地)である。この銅版画に関する記録も、明治三十八年(一九〇五)の『日鑑』(県史CH一五五―一三九)に記されているので紹介する。

〔明治三十八年〕三月十二日 一、東京浅草茅町式丁目精行社々員霜鳥晴登峰」

〔三月廿二日 一、霜鳥晴社降〕

明治三十八年(一九〇五)三月十二日、明治二十一年(一八八八)版の原画も手掛けた霜鳥晴が、三峰神社に登山した。霜鳥は、この時

点でもまだ精行社の社員であり、その後、十日間神社に滞在して写生を行ったのである。

銅版画はその四ヶ月後の七月十五日に発行された。第七代埼玉県知事千家尊福が三峰神社に詣でた際に詠んだ和歌「二神のたゝし、天のうき橋は、いまもかゝり峰のしら雲」が添えられた、精緻な彫りの大判の銅版画である。そして、『日鑑』（県史CH一五五―一四〇）の九月二十四日には次のように記されている。

「九月廿四日 一、東京玉塚商店より本社全図額面奉納二付、受取書て一番組庄左衛門大宮町角屋旅舎迄遣ス、夜二入帰社」

九月二十四日、玉塚商店は、秩父大宮（現秩父市）の角屋旅館で、神社側に「本社全図額面」を奉納した。現在、三峰神社には版画のみが伝わっており、原版がないことから、これが銅版原版を指すのかどうかは不明である。なお、三峰神社が毎日記録していた「日鑑」には、精行社以外にも、多くの画工の名が記されており興味深い。

『官幣中社金鑽神社境内真景』（図11）（岸田氏収集 七三〇六）に描かれた金鑽神社（現神川町）は児玉郡神川町二ノ宮にあり、本殿はなく御室嶽を御神体とする古い祭祀形態を持つ神社である。明治三十五年（一九〇二）発行のこの図には、空翠・石塚鍛画と画工の名がある。石塚空翠は、『風俗画報』にも画を描いており、『浮世絵備考』百三十七頁（梅本鐘太郎著 東洋堂支店 明治三十一年（一八九八）刊 近代デジタルライブラリー）中に名があるが、伝は記されていない。図には、天文三年（一五三四）建立の多宝塔（重要文化財）をはじめ、拝殿・鳥居・燈籠・駒繫石・旗懸銀杏などが描かれているが、それは現在も銅版画のままに残っている。

鷲宮神社（現久喜市）を描いた『埼玉県南埼玉郡鷲之宮村鎮座鷲宮神社境内之全図』は、明治二十三年（一八九〇）九月刊行の精行舎銅版部製で、社宝や文書、碑文が添えられている。画工や彫師の名はなく、枠外に画作兼印刷発行者として青山豊太郎（神田区柳原河岸二十号地寄留）の名が記されている。精行社の大判の社寺の銅版画には、画工や彫師の名を記さない場合も見受けられる。鷲宮神社所蔵の図は、久喜市立郷土資料館に寄託されているが、状態が良くない。利用については、当館が山口県文書館所蔵資料をマイクロフィルムに撮影して焼付けた複製資料（県史CH三七三―一六九）が閲覧・複写できる。

『埼玉県比企郡三保谷村大御山広徳寺全図』（図12）（鈴木庸家九三五二）は、石田呼友（石田孝友）写生、渡辺広方縮図の精行社銅版部製の作品である。広徳寺（現川島町）は源頼朝の家人美尾屋十郎広徳の開基と伝えられる真言宗豊山派の寺である。境内の杉並木、屋根を替えた本堂、大御堂が現存している。本堂左の基壇上に建つ大御堂は室町時代の建立で、関東に残る中世の仏堂建築として重要文化財に指定されている。この屋根は、修復にあたって室町時代風にされたが、銅版画の屋根は、修復前の先端が上がった江戸期の形で描かれている。古墳の上に立つ「三保谷十郎の塚」も現存している。

『埼玉県入間郡高麗村高麗山聖天院境内全図』（図13）（小室家五六二四）には、渡辺広方写、皆川華岳（皆川欽太郎）刻、国之譽発行処、東京浅草町精行社印行とある。精行社は、明治二十年代の『博覧図』に続き、明治三十年代には『國之（乃）譽』を発行した。画は『博覧図』と同様の描き方だが、ローマ字表記がないものもある。

聖天院（現日高市）は高麗山勝樂寺と号す真言宗智山派の寺院で、

山門脇には、高句麗から渡来した高麗王若光の墓がある。山門や階段、阿弥陀堂などは現存しているが、平成十二年（二〇〇〇）に裏山の部分に本堂が新築され、図にある本堂の跡地は庭園と庫裡になっている。

また、当館には収蔵されていないが、後述する『大日本博覧図』第七編（『精行舎 明治二十五年（一八九二）刊』）には、『埼玉県北埼玉郡不動岡村大字不動岡玉嶠山総願寺』、『埼玉県北埼玉郡大越村大字大越徳性寺』が、『日本博覧図 第拾編』（『精行社 明治二十七年（一八九四）刊』）には、前述した『埼玉県賀美郡神保原村延喜式今城青坂稲美池上神社』と『埼玉県賀美郡賀美村大字金久保陽雲院之真景』、『埼玉県北埼玉郡不動岡村大字不動岡玉嶠山総願寺』が載っている。

東松山にある箭弓稲荷神社（現東松山市）の銅版画『埼玉県武州松山箭弓神社境内全図』（渡辺広方画 皆川華岳（皆川欽太郎）彫 天理参考館収蔵）の図もまた、明治二十九年（一八九六）十月刊行の精行社の作品である。

その外、埼玉県立図書館には、熊谷寺（現熊谷市）を描いた石版画『武州熊谷町熊谷寺境内全図』（埼玉書庫貴重書 S188ク）がある。熊谷町熊谷印刷所石印とあり、画工や彫師の名はない。添えられた説明によれば、熊谷寺は、嘉永七年（一八五四）の火災で堂宇を失い、庫裡だけを再築していたが、明治三十二年（一八九九）の冬に本堂を再建したとあり、その記念に刊行したとすれば同時期の作品であろう。平林寺（現新座市）が所蔵する銅版画『武州野火止臨濟宗金鳳山平林禅寺之景』は、画作兼印刷者齊田喜市（東京市下谷区谷中三崎町五十番地）、彫師汀山、編輯兼発行者平林寺執事岩田全麿（埼玉県北足立郡大和田町大字野火止）である。この図は、『特別展 平林寺』（埼玉

玉県立博物館 平成十五年（二〇〇三）刊）に収録されている。解説によれば、図は明治四十年（一九〇七）九月に刊行されているが、明治四十一年（一九〇八）十一月に上棟した建物が描かれていることから、前述の氷川神社の銅版画同様に、完成予想図であったと思われる。また、刊行年は不明だが、杉戸町の文魁舎が印刷した『武蔵国北葛飾郡高野村龍燈山永福寺境内全図』（現杉戸町）（個人蔵）には、精行社の画工東涛舎巴凌（霜鳥晴）が画を描いている。

### （三）その他（秩父橋・英和学校・野口家等）

次に、寺社以外を対象にした版画を見ていきたい。

近代的な橋を描いた銅版画がある。本庄駅から大宮郷（現秩父市）を結ぶ秩父新道の工事は、明治十六年（一八八三）に着工され、明治十九年（一八八六）年四月に竣工した。工事の経過を記した『埼玉県児玉秩父西部新道事業報告書』（高野（作）氏関係文書 七六）には、荒川に架けられた木鉄混交のトラス橋「秩父橋」（図14）の銅版画が添えられている。賛々社門人烈山銅鑄、森文刷工とある。この橋脚は、今も文化財として残されている。

私立埼玉英和学校は、明治十九年（一八八六）に設立され、大正十年（一九二二）に県に移管されて埼玉県立不動岡中学校となり、ついで学制改革により埼玉県立不動岡高等学校になった。『私立埼玉英和学校（絵葉書）』（図15）（岡戸家 三四）は、創立者岡戸文右衛門と網野長左衛門の写真を、精行舎製の『博覧図』に重ねたもので、昭和三年（一九二八）一月の不動岡中学校創立四十周年記念で配られた。原画は、明治二十二年（一八八九）十二月一日に画工秋谷椋月（秋谷梅之

助が写生し、村上樞山(村上都義)が刻した『博覧図』の一葉である。『大日本博覧図』〔第七編〕(明治二十五年(一八九二)刊)と、『日本博覧図 第拾編』(明治二十七年(一八九四)刊)に掲載されている。

『埼玉県北葛飾郡高野村大字茨島野口藪』(図16) (岸田氏収集 七三〇七) は、東涛舎巴凌(霜鳥晴) 写生縮図、村上樞山(村上都義) 刻、精行舎銅印行とある作品で、『大日本博覧図』〔第七編〕(明治二十五年(一八九二)刊)と『日本博覧図 第拾編』(明治二十七年(一八九四)刊)にも掲載されている。野口藪(一八五八〜一九〇五)は茨島村(現杉戸町)出身の政治家で、明治十七年(一八八四)に県会議員、ついで衆議院議員を務め、明治三十年(一八九七)には貴族院多額納税議員に選出された人物である。図には野口家の屋敷の様子が細かく描かれており、野口藪の漢詩や、父親雪蓑の俳句も添えられている(巻末図版参照)。

なお、個人の邸宅や店舗の図としては、後述する『大日本博覧図』(明治二十二年(一八八九)刊)、『大日本博覧図』〔第七編〕(明治二十五年(一八九二)刊)、『日本博覧図 第拾編』(明治二十七年(一八九四)刊)に六十余点の作品がある(表四参照)。

また、川越市立博物館には、古市場河岸の醸造問屋を描いた精行社の銅版画『埼玉県入間郡南古谷村大字古市場橋本三九郎邸宅之図』がある。年月は記されていないが、ひろ方画、義雄刻とあり、画工は渡辺広方、彫師は石井義雄である。賑わう河岸場の様子が見て取れる。

その外、青木忠雄氏所蔵の大宮の水川公園内の割烹旅館萬松楼を描いた銅版画『水川公園萬松楼高島之景』が、『埼玉史談 五十三巻第一号』(埼玉県郷土文化会 平成十八年(二〇〇六)四月刊)の口絵

に掲載されている。青木忠雄氏によれば、この図には、画工・彫師・発行者等は記載されていないとのことである。

調神社や高麗山聖天院の図を手がけた皆川華岳(皆川欽太郎)は、吉見百穴(現東松山市在)の石版画『西吉見村百穴之図』(図17) (岸田氏収集 七二二八)を描いている。長閑な味わいのある作品である。

#### (四) 秩父を描いた江戸の銅版画家安田雷洲の肉筆画

『足羽先生提安藤文沢雪行図』(図18) (小室家 六〇八九) は、江戸の銅版画家安田雷洲<sup>17)</sup>の肉筆画である。安田雷洲は葛飾北斎の門人で、名は尚義、この画には、「雷洲生尚義製」とある。この画は、比企郡番匠村(現ときがわ町)の医師小室元長<sup>18)</sup>に、江戸で鳥羽藩医をしていた弟子の安藤文沢<sup>19)</sup>が贈ったものである。師と二人で、雪の秩父へ往診に出かけた思い出が込められている。

元長の弘化三年(一八四六)の日記『忽忘』<sup>20)</sup>(小室家 九六九)に、「東都より三峰山雪中之旅行之図、安藤子弟より贈ル、此図によりて菅笠翁と称し可申也」と記されていることから、製作は弘化三年(一八四六)頃と推定される。安田雷洲は作品に西洋画の要素を取り入れたことが知られているが、この画にも西洋風景画の影響が窺える。

#### 二 県外を描いた銅版画

##### (一) 名所(東海道五十三次・妙義山・松嶋)

小室家には、前述の江戸の銅版画家安田雷洲の銅版画の代表作である『東海道五十三駅』の内の一枚、No.11(図19) (小室家 五八二七) が収蔵されている。四図が縦に連続しており、鳴海、宮、桑名と四日

市の夜の風景が描かれている。シリーズ中、このNo.11だけには、「てほ十五甲辰七月廿八日」と天保十五年（一八四四）七月二十八日の刊行年月日が入っている。色褪せて不鮮明であるのが残念である。

『上野国金洞山中之嶽真図』(図20) (田中家 一三五二) は、森霞巖<sup>(21)</sup> (前橋紺屋町百五番地) 画、工藤武雄 (群馬県北甘楽郡中ノ嶽神社) 編輯出版、玄明堂 (前橋石川町廿六番地) 印刷の銅版画である。群馬県妙義山の金洞山は中之嶽と呼ばれ、中之嶽神社は、轟岩を御神体とする石門巡りの起点になっている。この図には、大槻磐溪の漢詩と、群馬の国学者新居守村の和歌が添えられている。この画の裏には、明治二十七年（一八九四）に妙義山に参詣した際に購入した記録がある。

松島を描いた銅版画や石版画については、中西僚太郎氏が「明治・大正期の松嶋を描いた鳥瞰図」(『近代日本の視覚的経験』所収 ナカニシヤ出版 平成二十年(二〇〇八)刊) に詳しく紹介しているが、当館にはその内、次の四点が収蔵されている。

『陸前国塩釜松嶋真景全図』(図21) (土屋家 (旧土蔵坊) 四四〇) は、明治二十八年（一八九五）三月に、盛光堂の蜂屋十馬 (仙台市国分町壹丁目五十四番地) が著作印刷した松嶋湾を描いた銅版画で、遠く石巻や金華山も描かれている。塩釜停車場や、帆船と蒸気船が停泊する塩釜港、雄島の頼賢ノ碑・金華山・沖ノ井・都島・野田玉川・御釜神社・牛石明神・坪ノ碑・燕沢碑などが添えられている。仙台の盛光社の蜂谷十馬は、長期間に亘って松島の名所図を刊行し続けた。

『松嶋塩釜真景全図』(図22) (中村(宏)家 四一九) も盛光堂の蜂屋十馬 (仙台市国分町壹丁目八十七番地) が大正三年（一九一四）二月に刊行した銅版画で、明治二十八年（一八九五）の版と較べると、

ホテルという名称が増えていることが分かる。松嶋瑞巖禪寺の境内図と周辺の名所が添えられている。

同じ松嶋を描いた『陸前富山大仰禪寺眺望之全図』(図23) (高橋(周)家 一九三九) も盛光堂蜂屋十馬 (仙台市国分町壹丁目五十四番地) の著作印刷で、大仰寺の稲富梵梁 (松嶋村字手持四十四番地) が明治三十年（一八九七）三月に発行している。大仰寺からの景観は、松嶋の「四大観」の一つ、北の富山の麗観である。この図には、古梁紹岷<sup>(25)</sup>と油井牧山の讚が添えられている。一見銅版画に見えるこの作品だが、上部に「本図木版磨滅ニ付、明治三十年二月石版画ニ改版ス」とあり、木版を転写した石版画であることが分かる。

また、『松嶋全湾之図』(川田氏収集 六四二九・六四三〇) は、笠原愷泉 (仙台市北六番丁十番地寄留) が描いた長大な松嶋湾の風景を巻物に仕立てた石版画で、伊勢斎助 (仙台市国分町四丁目十四番地) が印刷し、保瑞会 (幹事宮城郡七郷村南小泉七百八十一番地 早川智寛) が明治二十九年（一八九六）一月に発行している。石版印刷は、益辯堂の渡辺為治郎 (仙台市大町三丁目三十一番地) である。

(二) 温泉 (熱海温泉・草津温泉・修善寺温泉・四万温泉・伊香保温泉) 古文書の中には、熱海温泉・草津温泉・修善寺温泉・四万温泉・伊香保温泉等の近代の版画が収蔵されている。

『皇国第一之温泉豆州熱海全図』(図24) (小室家 四七〇八) には、海側から見た斜面に広がる熱海温泉が描かれている。熱海は江戸時代は將軍の別荘がある湯治場として知られ、明治以降も政府要人が度々保養や会談のために訪れた。明治七年（一八七四）には、国内で初め

て、ドイツ人マルチンによって温泉成分の分析が行われている。図中に建物が建っていない場所が御殿地と示されているのは、宮内省が岩崎弥太郎から無償取得した土地で、明治二十二年(一八八九)に御用邸が造営された。このことから、この図は、明治二十二年以前の作品と推定される。関戸明子氏の「熱海温泉の鳥瞰図の特色と表現内容」(『近代日本の視覚的経験』所収 ナカニシヤ出版 平成二十年(一九九八)刊)中の表によれば、出版元や編著者が記載されていないこの図は、明治十七年(一八八四)頃に刊行された図となる。所蔵者の小室家の小室元長は、明治七年(一八七四)から十三年(一八八〇)にかけて熱海を訪れていることが旅行記『熱海遊簿』(小室家 二七二)から知れるが、この図はそれ以降に入手したものとなる。

『草津鉱泉場之図』(図25)(橋本明氏収集 二一八三)は、明治十八年(一八八五)六月に出版された玄々堂松田敦朝(京橋区南鍋町一丁目一番地)の銅版画で、売捌は草津の栄覚堂である。群馬県の草津温泉は日本三名泉に数えられた名湯で、江戸時代から湯治客で賑わった。この図は、最上部に山並みを描き、中央部の湯畑を中心に道に沿って広がる温泉街を、俯瞰で描いている。旅館の大半は、木造の三階、四階建である。上部にドイツ人医師ベルツの『日本温泉考』から、温泉成分表と適応病名を載せている。

同じ草津を描いた『上州草津温泉全図』(図26)(篠崎家 四三五五)は、著者出版人が着生軒の宮崎十(群馬県吾妻郡草津村大字草津八十一番地)、印刷人が栄林堂の長谷川惣次郎(群馬郡高崎町大字本町六十番地)で、明治二十九年(一八九六)七月に出版された銅版画である。草津の温泉街を俯瞰した図を中央に描き、その周囲に全国の温

泉番付が付けられている。東西の大関は、草津温泉と有馬温泉である。外周には大日本鉄道線路略図が付され、駅間の運賃が表示されている。鉄道の発達と共に、人々が各地の温泉場を訪れるようになったことが窺える一枚である。

『豆州修善寺温泉場全図』(図27)(田中家 一三五二)は、著者兼発行者石橋初太郎(東京本所区松井町荳目九番地)が明治二十一年(一八八八)四月に出版した銅版画で、銅版画の上に色を重ねてある。発売元は、伊藤鎌吉(伊豆君澤郡修善村温泉場)である。伊豆の修善寺温泉は平安時代にさかのぼる歴史ある温泉で、近くに地名の由来となった修禅寺がある。温泉街の中心には修善寺川(桂川)が流れ、川の中洲には「トッコノ湯」と「シン湯」が描かれている。「独鈷の湯」は、弘法大師が湧出させたといわれており、今も、修善寺温泉のシンボルの存在である。温泉分析表や効能も挙げられている。

美しい山並みを背景に川沿いに広がる四方温泉を描いた『上野国四萬温泉之真景』は、明治二十二年(一八八九)九月に出版された渡邊保写生彫刻の銅版画である。白黒の図(図28)(鈴木庸家 九三九九)と、青と茶の二色を手彩色したもの(図29)(諸井興家 一七九)がある。前橋の完全社徳江幹造(群馬県東群馬郡前橋市曲輪町二十一番地)が印刷し、四方温泉の有力な旅館主関善平(群馬県吾妻郡沢田村大字四万百四十七番地)が発行者に、田村茂三郎(同県同郡同村百四十九番地)が著作者に名を連ねている。円形の部分には、湯前薬師として信仰を集める薬師堂のある、日向見温泉が描かれている。

四方温泉には、温泉番付が付された明治二十八年(一八九五)六月出版の小型の銅版画『上毛四方温泉真景』(図30)(吉場敏夫氏収集

一四三)もある。著作兼出版人は、佐脇貞五郎(東京府神田区三河町一丁目四番地)で、発売人は湯浅知三郎である。番付を前述の『上州草津温泉全図』と比較すると、東西の大関はやはり草津温泉と有馬温泉だが、小結以下には異同がある。

『上州伊香保鉾泉場名所全図』(図31)(鈴木(庸)家 九四〇〇)は、町栄堂町田太郎(東京市神田区新石町十六番地)が明治二十五年(一八九二)七月に発行した図である。伊香保温泉を守護する伊香保神社の下の急傾斜地に、温泉宿が石段を挟んで広がっている。各旅館にはイロハの番号が付けられ、下部に旅館名と経営者の名が示されている。周囲の山々や牧場、役場なども描き込まれており、遠くは水沢観音も見える。

最後に、大正期の美しい写真製版の図も紹介しておきたい。『上州伊香保鉾泉場全景』(図32)(川田氏収集 一七二九)は、群山堂主人菅野一峯が写生した精緻な画を、昇陽舎山内只七(東京向嶋白鬚神社前)が画作発行し、群山堂写真製版部が製版した大正二年(一九一三)八月発行の鳥瞰図である。斜面に広がる温泉宿にイロハの番号を付している。右下には、イの千登世館の写真があるが、ここには各旅館の写真を入れたと思われる。明治二十六年(一八九三)に造営された伊香保御用邸や、ハワイ国弁理公使アルウイン<sup>(28)</sup>の別荘なども描かれている。

### (三) 社寺(厳島神社・伏見稲荷・善光寺・称名寺等)

全国の社寺を描いた銅版画や石版画も古文書の中に収蔵されているが、これは、鉄道の発達により、埼玉からも各地の社寺へ参詣に出か

けられるようになり、お土産や観光案内として入手したものが大切に保存されてきたものである。

『厳島神社之絵図』(図33)(小室家 四七〇八)は、明治十一年(一八七八)四月に京都府平民山口音二郎(下京第十九区本神明丁四百七十番地)が出版したもので、素朴な味わいがある作品である。日本三景で有名な安芸(広島県)の宮島は古代から島そのものが神として信仰され、平安時代には平家一門の崇敬を受け、平清盛により社殿が造営された。この銅版画には、大鳥居や海に浮かぶ社殿、千畳敷や五重塔などの仏閣、芝居小屋が描かれており、海を渡る手漕ぎの小船や、宮島の鹿なども見える。

明治二十八年(一八九五)八月に出版された『京都伏見官幣大社稲荷神社之全図』(図34)(西角井家 九八六一)は、明治二十八年(一八九五)の建都千百年を記念して製作された精行社製の銅版画で、画は渡辺広方、彫は兼松正義、印刷兼発行者は青山豊太郎(東京浅草区茅町二丁目三番地)である。京都の伏見稲荷大社は全国三万以上の稲荷神社総本宮であり、この図には、広大な伏見稲荷全体が描かれている。画枠には稲穂がデザインされており、千本鳥居も描かれている。東京浅草の精行社は、京都にも進出し、社寺の銅版画を手掛けたのである。

『善光寺境内并二近傍名所図』(図35)(杉田家 八四二)は長野市の中村活版所中村信太郎(長野市二千八百十九番地)が編輯発行し、林清助(長野市二百四十五番地)が印刷した明治三〇年(一八九八)六月刊行の銅版画である。信濃(長野県)の善光寺は、「遠くとも一度は詣れ善光寺」といわれるように、宗派を超えて全国の老若男女の

信仰を集め、明治二十一年(一八八八)に長野駅が開業すると、鉄道を使って全国から参詣団体が押し寄せるようになった。この図の周りには、戸隠神社や諏訪湖など、近傍の観光名所も描かれている。

『金沢称名寺境内図』(図36)(田中家 一三六〇)には、題名、画工名、作成年月の記載はない。称名寺(横浜市在)は、北条氏の一族、金沢実時が開基した真言律宗の寺院で、鎌倉幕府の滅亡とともに衰退し、江戸時代になって復興された。現在の称名寺の境内は、中世の「称名寺絵図」を参考に池を広げて整備されているが、この図の庭は修復前の池がまだ小さい状態であり、堂宇や金沢文庫へ通じるトンネルなどが描かれている。

全国の社寺については、石版画や亜鉛版印刷も残っているので、併せて紹介したい。

『信濃国木曾御嶽山全図』(図37)(宇野家 二六二四)は、明治二十七年(一八九四)六月に竹倉健太郎(愛知県知多郡半田町八百九番地)が発行印刷した石版画で、編輯は神龍丹・百草・奇応丸を販売する福島本町の回生堂本舗の兎野文助(長野県西筑摩郡福島村六十四番地)である。御嶽山は、御嶽信仰の山であると同時に、古来より薬用植物の宝庫であった。回生堂本舗では、薬の外に、御嶽山の掛物類や山絵図も販売していた。周囲には木曾八景を詠んだ和歌が添えられている。<sup>29)</sup>

『比叡山延暦寺案内全図』(図38)(中村(宏)家六六六)は、明治四十四年(一九一一)六月に刊行された比叡山全域を境内とする広大な天台宗総本山延暦寺(滋賀県大津)を描いた石版画で、山を東塔・西塔・横川の三つに分け、三塔十六谷の堂塔を示している。琵琶湖に

は汽船が走り、湖岸に汽船乗場があり、三井寺も見える。参道には朱色が差してある。著作兼発行者は佐井紀皎寛(滋賀県滋賀郡阪本村)、印刷者は芝通太郎(京都市二條通河原町東入四番戸)である。

『筑前国太宰府神社之全景及十二景』(図39)(中村(宏)家 四五〇)は、明治三十五年(一九〇二)の千年祭で刊行された亜鉛を材料とする印刷版を使うジンク版の境内図で、黒田清高(福岡市博多土居町四番地)の著作・印刷・発行である。満開の梅の中に、楼門、本殿、心字池、三世一念の太鼓橋と平橋、大祭記念建設の文書館などが描かれている。大祭に当たって二日市駅から馬車鉄道が引かれたため、上部に「馬車鉄道の便あり」とある。周囲には、天弁山・大城山など近隣の名所十二景が添えられている。

#### (四) 成田山新勝寺

成田山新勝寺については、埼玉から近く、参詣し易いこともあり、六枚の図が収蔵されている。

まず、江戸時代の木版画としては、前述した秩父小鹿野の彫刻家森玄黄斎(鹿野竹雅)の手になる天保五年(一八三四)の『成田山真景之図』(図40)(小室家 四六九四)がある。雲を効果的に使い、境内の主要な建物を、名称を付して描いている。参詣人は描き込まれていない。この図には、その後、安政五年(一八五八)に唐破風と千鳥破風を取り払って山上に引き上げられて光明堂となる元の本堂や、現在は薬師堂として保存されている元の光明堂が描かれている。境内の右奥には鳥居があり、鎮守・妙見宮・清瀧権現が鎮座しており、神仏習合時代の様子が分かる図である。

『大日本帝国下総国成田山全図』(図41)(木村家 六二八)は、明治二十四年(一八九二)四月刊行の醒夢堂製の境内図である。この図の本堂は、現在は阿弥陀堂になっている。また、前述のように、この図の光明堂は、安政五年(一八五八)にそれまでの本堂を引き上げたものである。神仏分離により、奥にあった鳥居はなくなり、権現神社は清龍殿と名前が代わっている。寄進記念の石碑が一つ一つ細かく描き込まれている。

著作兼発行者は浅井造(千葉県下総国下埴生郡成田町三百四拾二番地)、印刷者は成田功(東京日本橋区兵服町一番地)、銅版画の製作は銅石版彫刻印刷所醒夢堂(東京日本橋区横山町三丁目)である。醒夢堂の当館収蔵の銅版画は、この図と、後述する『大日本帝国東京金龍山浅草寺之図』の二枚があるが、いずれも正確な遠近法による俯瞰と、クリアな線の表現が、画工や彫師の技術の高さを窺わせる。両者とも「画工や彫師の名は記されていないが、銅版画に詳しい千田晃平氏より、画家は佐々貴醒夢であること、醒夢堂の作品には、枠の四隅に四角を組み合わせた模様が描かれていることを御教示いただいた。

成田山の近代の境内図の中で最も多く版を重ねたのは、細かな石碑まで丹念に描き込まれ、由緒や広告を添えた『成田山全図』と題された銅版画及び石版画である。当館にも四枚が収蔵されているが、この版画は二箇所から出版されている。明治二十年代後半に刊行された『日本博覧図 千葉県之部』には、一粒丸元祖三橋吉兵衛と一粒丸惣本家木内嘉右衛門の二家の薬局の図が載っている。加えて、『成田山全図』には、一粒丸本舗小田垣利八の広告が載っているものがあり、一粒丸は複数の業者によって製造・販売されていたことが分かる。こ

の内、三橋吉兵衛と小田垣利八の広告を載せた『成田山全図』が刊行されているので見ていこう。

山門前の三橋薬局は、江戸時代、毎年嵯峨御所へ薬を納めることを許された老舗で、道中薬「一粒丸」の元祖として店売りを行っていた。

三橋薬局の主人三橋吉兵衛(千葉県印旛郡成田町三百六三番地)が画作・発行した『成田山全図』は、明治二十二年(一八八九)に版權免許をとり、慶雲堂三間七兵衛(東京市京橋区銀座三丁目十七番地)が印刷したものである。十二銭で販売し、毎年版を取り替えるほど大量に売れて、版を重ねていった。当館には明治三十四年(一九〇一)

一月の二十一版の『成田山全図』(図42)(鈴木(庸)家 九三九八)が収蔵されているが、克明に描かれた境内に加え、成田駅や汽車、パノラマ館なども描かれている。山門前の店舗の左隅には、発行者の三橋薬局が薬名とともに描かれている。そして、この図の余白には以下のような注意書きがある。

「購求諸君注意、成田山一粒丸・成田山明王散・成田山血留明治散の三葉ハ、安永六四年拙家先祖三橋吉兵衛謹製する所にして、其効験の著しきを以て世に益々名声を博するに随ひ、近年当地に於て新に同名類似の三葉を販売し、拙家製を妨げんとして、旅人宿へセリ売する者往々有之候が為め、御参詣の際知らず知ず該類似を購求し、他日薬用して拙家製薬と大ニ其効能の相違あるに始て御心付なさる、諸君も有之、故に、成田山御参詣の節ハ「登録商標」従来の「鶏の印」は勿論、成田山門前三橋吉兵衛御覧の上御求めを乞ふ」とある。また、図中にも、「元祖三橋ハ旅人宿へ自らせり売ハ差出し不申候、惣本家元祖 ㊦三橋吉兵衛 敬白」とある。三橋が元祖である薬と似た薬を旅

館へ出張販売する者が出たため、困った三橋は『成田山全図』に注意書を入れて印刷したのである。同様の図で明治三十六年(一九〇三)二月の三十版(篠崎家 四九五一)も収蔵されている。

これに対し、ほぼ同じ図柄で、小田垣利八の一粒丸を広告に載せる石版画『新刻改正訂正増補成田山全図』(図43)(鬼久保家 一〇一七)が発行されている。これは、進修堂石版部原山兵治(東京市日本橋区浜町三丁目五番地)発行のもので、明治二十九年(一八九六)の版である。この図では、成田町仲町の小田垣利八の一粒丸を広告し、門前の三橋薬局の店については、ただ「三橋」としか記していない。

そして余白には、「本図ハ最近ノ出版ニシテ編著正確印刷ノ鮮明トヲ以テ夙ニ非常ノ好評ヲ博シ、発行以来日尚ホ浅シト雖モ、顧客日ニ増加シ、其ノ発行無慮ナルヲ見、近頃悪評流言ヲ試ミ、或ハ訴訟ヲ提起シ、以テ本図声価ヲ中傷セント計ルモノアリ、然トモ一々此徒ヲ排斥シテ大ニ光輝ヲ添タリ、是レ必竟本図編著カ周倒綿密ニシテ正確鮮明低廉ヲ兼備ルカ故ナリト雖、一ニ諸君庇蔭ニ由ル所ニシテ、弊堂大ニ謝スル所ナリ、今茲ニ再版スル盛運際セリ、由テ訂正増補シ一層精密加ヘタリ、一タビ繻クトキハ身霊場ニアアルノ思ヒ有ン、実ニ諸君ノ好同伴ト云フベシ、本図特ニ掲クル所、成田山御霊薬一粒丸ノ義ハ海内無比ノ良薬ニシテ、従来小田垣家ノ発売スル所ニ係ル濟世ノ為メ特ニ諸君ニ照会ス(近来類似品アリ、御注意ノ上御求ヲ乞フ)とある。

この図は、山門前の紺谷長之助の越中屋で、三橋のものより二銭安く、十銭で販売されていた。当館には、明治三十二年(一八九九)四月に発行された、注意書のない小田垣利八の薬の広告を載せた同じ図柄の進修堂石版部の石版画『新刻改正訂正増補成田山全図』(図44)(川

田氏収集 一四五五)も収蔵されている。

これらの『成田山全図』からは、薬の販売や図版の著作を巡る問題が、当時生じていたことが窺われる。

三橋薬局は今も山門前で、自家製の「一粒丸」を販売しており、店舗は登録有形文化財として、明治時代の外観を保っている。新勝寺の入り口付近の池の橋には、三橋吉兵衛が寄進した欄干が残っており、昔は、正月だけはこまで出て薬を販売したという。

なお、この『成田山全図』については、展示期間中に、文書館の利用者が、自宅に保管されていたものを、参考にと持参してくださった。御札や木曾御嶽の境内図などと一緒に、神棚に上げられていたのとこのとである。明治時代の参詣の際に入手された銅版画は、百年の間、神棚で大切に保管されていたのである。

#### (五) 帝都東京(東京名所・浅草寺・地図等)

東京の文明開化の様子は、華やかな色彩の木版の開化錦絵に多く描かれている。当館収蔵の小室家には錦絵を貼り継いだ長い巻物(小室家 六三六二・六三七七)があり、『東京滑稽名所』を始め、明治期の開化錦絵が多く残されている(これらは貴重書のため、通常は複製写真での閲覧となる)。

これに対し、帝都東京を描いた銅版画の収蔵は少なく、数点しか見当たらない。

『東京横浜名所独家内図』(図45)(高橋(周)家 二九三九)は、上野停車場前の旅館東洋館(東京下谷区仲徒町四丁目四十二番地 電話 本局二二七四番)が客に配った、横浜と東京の銅版名所案内図である。

国会議事堂・東京府庁・日本銀行などの洋風建築や、増上寺・浅草観世音・亀戸天神などの神社、吉原・洲崎の遊郭など、五十ヶ所以上が載っており、裏面には東京市街独歩案内の地図が付いている。旅館名の部分は、注文した旅館名が刷り込めるようになっていて、

『大日本帝国東京金龍山浅草寺之図』(図46)(足立家 九一三)は、彫刻印刷所醒夢堂(浅草駒形町)が明治二十一年(一八八八)一月に出版した大型の銅版画で、画家は佐々木醒夢である。浅草寺で一枚十銭で頒布されていた。浅草寺は江戸時代に徳川将軍家に重んじられ、観音霊場として多くの信者を集め、さらに天保年間(一八三〇〜一八四四)に門前に芝居小屋が移転してきてからは、庶民の盛り場として発展した。この図を見て驚くのは、雷門が描かれていないことである。雷門は慶応元年(一八六五)年に焼失して以来、昭和三十五年(一九六〇)に松下幸之助が再建するまでの期間は、存在していなかったのである。関東大震災と東京大空襲により、浅草寺は現在ほとんどの建物が建て替えられ、塔の位置なども変わっており、この銅版画は、今はない明治時代の建物が描かれている貴重な一枚といえる。大勢の参詣人や鳩の豆売りまでが描き込まれており、見飽きることがない。

その外、周囲に建物を銅版画で添えた銅版の地図がある。『東京市実測明細全図』(図47)(鈴木(庸)家 九三五一)は著作件発行印刷人清水文蔵(東京市浅草馬道町八十一番地)、発売者金林堂(神田松住町)で、明治二十八年(一八九五)十一月に刊行された銅版の地図で、宮城や離宮など、皇室関係は赤で着色されている。周囲には役所や名所を緻密に描いた銅版画が周囲に配され、日本鉄道の里程も付けてある。左上に横浜の地図、右上に関東・関西の鉄道線路

明細図が添えられている。

『改正東京全図』(図48)(鈴木(庸)家 九三七〇)は、明治二十八年(一八九五)九月に嵯峨野彦太郎(東京市神田区橋本町二丁目九番地)が編輯発行印刷した銅版地図である。府下の町村名の表が付けてあり、主要な役所・神社・名所の銅版画を周囲に配している。黄色く着色した部分には、三日間で回る東京巡りの行程が示してある。

この二点の地図には宮城部分が細かく描かれていないが、翠月堂の愛知県平民加藤兵太郎(深川区常盤町一丁目七番地)が明治二十一年(一八八八)三月に著作印刷発行した大型の木版画『大日本帝国御造営之図』(図49)(高橋(周)家 一〇八)には、同年十月に竣工した明治宮殿が色刷りで描かれている。銅葺の屋根を持つ檜の和風建築の宮殿であったが、公的な部分の内装は、壮麗な装飾を施した椅子式の洋式であった。手前が謁見所や食宴所のある表宮殿、その奥が天皇皇后の生活の場である奥宮殿で、渡り廊下でつながった隣の城のような洋館は宮内省である。

銅版画に続き、急激に広まったのが石版画であった。石版画は、銅版画に較べて製作し易く、着色された物も多い。帝都東京を描いた石版画は大量生産され、土産物として販売された。当館にも多くの作品が収蔵されているので見ていこう。

『歩兵第三聯隊兵營之図』(図50)(土屋家(旧土蔵坊) 四三五)は、相澤曾一郎(東京市麻布区龍土町五番地)の画作印刷で、厚生堂相澤富蔵(東京市京橋区南伝馬町一丁目一番地)が明治三十二(一八九九)年十月に発行した石版画で、右上に、「歩兵第三聯隊御許可」とある。大日本帝国陸軍歩兵第三聯隊の兵舎や演習場、訓練中の兵士達

などが細かく描写されている。

また、明治四十年(一九〇七)三月から七月まで、上野公園を会場として東京勸業博覧会が開催されたが、開催直前には数種類の石版画が出版されている。明治四十年(一九〇七)二月に嵯峨野平左衛門(東京市神田区東松下町廿二番地)が著作印刷発行した『東京勸業博覧会全図』(図51)(川田氏収集 一四五六)は、石版画に二色を彩色したもので、会場の建物と陳列品を紹介している。三号館の前に設置された日本初の観覧車や、キリンピヤホールなどが描かれている。当時まだあった大仏も見ることができる。

同じく明治四十年(一九〇七)の勸業博覧会を描いた柳澤御蔵(本郷区湯島天神町壹丁目八十七番地)発行、益川倉吉(下谷区南福荷町参拾壹番地)著、坂田万次郎(牛込区矢来町壹番地)印刷の『東京勸業博覧会全図』(図52)(鈴木(庸)家 九三五九)は、多色刷の会場の案内図で、路上には、路面電車も走っている。図の下部には靖国神社・皇居・浅草観世音・日々谷公園などの観光名所と並び、この図のスポットナーである池之端仲町の守田宝丹(胃薬)の店舗が描かれている。

『明治神宮全景』(図53)(飯田氏収集 一一)は、大正九年(一九二〇)に完成した東京代々木に鎮座する明治天皇・昭憲皇太后を祭る明治神宮を描いている。小林印刷所(東京市赤坂区青山北町四丁目九十七番地)が石版印刷し、大谷青山堂(東京府下千駄ヶ谷隠田百八十九番地)が大正九年(一九二〇)に発行している。七十万平方メートルの敷地には、全国から樹木が寄せられ植樹されたが、完成直後のこの石版画では、まだ木が小さく、現在のように鬱蒼とした森にはなっていない。明治神宮の社殿は昭和二十年(一九四五)の空襲で焼失し、昭

和五十八年(一九八三)に再建されたため、創建当時の社殿や、地名の由来となった樅の大木「代々木」が描かれた貴重な石版画である。

三省堂が刊行した教育掛図の一枚である『東京二四 東京名所(其一)』(図54)(川田氏収集 一〇六九三)には、靖国神社、明治神宮、宮城、楠木正成の銅像、遊就館、東京駅が載っている。大正三年(一九一四)開業の東京駅は、辰野金吾が設計したドーム屋根の三階建煉瓦建築で、深谷の上敷免で生産された日本煉瓦の煉瓦も使われた。戦災で焼けた東京駅は二階建てに改修され、両端のドーム型の屋根は失われていたが、平成二十四年(二〇一三)十月に開業当時の丸いドーム屋根に復元された。この掛図に見るように、大正に入るとオフセット印刷で写真がカラーで美しく印刷できるようになり、明治中期以降から盛んに製作されていた銅版画や石版画は、急速に衰退していった。

#### (六) 教科書『帝国読本』扉絵

学海指針社(東京市日本橋区通油町十六番地)が編輯し、集英堂(本店 東京市日本橋区通旅籠町十一番地、活版所 東京市京橋区山城町六番地)が印刷・販売した国語の読本『帝国読本』(明治二十五年(一九二二))は、編集方針に、「生徒ノ注意ヲ喚起シ興味ヲ添ヘンガ為ニ、挿画ノ必要ナル言ヲ俟タズ、其必要ヲ感ズルト同時ニ、画ノ趣味アラソコトヲ欲ス、是レ本書名家ノ画ヲ挿入シタル所以ナリ」と述べ、挿絵に力を入れた編集を行っている。

明治美術会の浅井忠<sup>(31)</sup>、小山正太郎<sup>(32)</sup>、五姓田芳柳(二世)<sup>(33)</sup>を始め、印藤真楯<sup>(34)</sup>などの洋画家や、浮世絵師小林清親<sup>(35)</sup>に挿絵を依頼している。中でも、各巻の扉画には、単元のひとつを題材とした素晴らしい版画作

品を掲載している。

これらの細かいタツチの版画は一見銅版画に見えるが、合田清<sup>36)</sup>の開設した正巧館の名があることから、銅版画ではなく小口木版であることとを、天理参考館の中谷哲二氏に御教示いただいた。巻之二、巻之三、巻之六には正巧館刀とあり、巻之五には金子政次郎<sup>38)</sup>刻、巻之八、高等科巻之五には森山天葩<sup>39)</sup>刀と彫師の名がある。

巻之一(図55)(宇野家 二四一三)の扉絵には、乗合馬車が走る通りに面した集英堂の店頭風景が描かれている。村祭りへ向かう三人子供たちを描いた巻之二(図56)(宇野家 二四二四)の扉絵には、AとCを組み合わせた浅井忠のサインがある。巻之三(図57)(飯野家 九八〇)の扉絵には、日の出の中、学校への道を辿る子供達がかかれ、不同舎の印があることから、小山正太郎作品であることが分かる。巻之四(図58)(宇野家 二三九五)の扉絵には画家名はないが、天長節に奉祝歌を歌う子供たちと洋楽器に加え、教育勅語・君が代・宮城・日の丸・大日本帝国地図など、明治の教育を凝縮したような図柄が描かれている。巻之五(図59)(宇野家 二六〇四)の扉絵は、博物館に飾られた甲冑や槍などの武器の画で、浅井忠のサインがある。巻之六(図60)(宇野家 二六九四)の扉絵は動物園の図で、五姓田芳柳(二世)のサインがある。流行の水兵服を着た子供の姿も見える。巻之八(図61)(宇野家 二四一六)の扉絵には、印藤真楯の描いた美しい日本三景が描かれている。高等科の巻之五(図62)(安部家 一一四)の扉絵には画家名はないが、第三回内国勸業博覧会が描かれている。なお、高等科の巻之六(図63)(安部家 一〇九)の扉絵は石版画で、五姓田芳柳(二世)が、宮中正殿で挙行された大日本国憲法発布式の

様子を描いている。周囲にはその日の東京の慶祝行事が細かく描写されており、興味深い。宮城広場に集まる山車の群れ、夜來の雪が積もった中、奉祝の飾りが付けられた永代橋、花やしきの象の見世物が繰り出している様子などが記録されている。

#### (七) 見立番付

最後に、東花堂宮田宇兵衛(京橋区南伝馬町一丁目二番地)が明治十四年(一八八一)二月に出版した『明治十四年二月改東京大家見立儒詩文書画一覽表』(図64)(川田氏収集 三一五二)に触れる。

この番付には五百人余りの人々が登場しており、明治維新に活躍した伊東博文、大隈重信、松方正義、勝海舟、徳川慶喜などが、書家や儒家の大家として列せられている。

また、後述する『博覧図』の題字や序文を書いた長三洲、伊東桂洲、東久世通禧、大鳥圭介らも名を連ねている。洪沢栄一、奥原晴湖、河鍋曉斎など、埼玉ゆかりの人物も多数登場する。

そして、玄々堂緑山と梅村翠山の名が挙がっている。初代玄々堂の長男松田緑山(一八三七〜一九〇三)は、銅版画の京都名所絵や藩札を手がけ、維新後は、太政官札や龍紋切手の印刷を行った。その後石版技術を学び、玄々堂の銅石版部を組織して弟子を育て、銅版から石版への橋渡しをした。上総出身の梅村翠山(一八三九〜一九〇六)は、江戸に出て銅版を学んで銅板彫刻の会社を開き、弟子の霞山と耕山を渡米させて石版技師を日本に招き、石版技術の開発に貢献した。玄々堂緑山と梅村翠山は、書画の部の銅版・石版に記載されている。



図1



図2



図3



図4



図5



図6



図7



図8



図9



図10



図11



図12



図13



図14



図15



図16



図17



図18



図19



図20



図21



図22



図23



図24



図25



図26



図27



図28



図29



図30



図31



図32



図33



図34



図35



図36

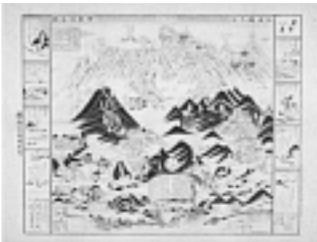


図37



図38



図39



図40



図41



図42



図43



図44



図45



図46



図47



図48



図49



図50



図51



図52



図53



図54



図55



図56



図57



図58



図59



図60



図61



図62



図63



図64

表一 収蔵銅版画一覧表 (関連版画を含む)

\*印は他機関収蔵

No.	図番号	種類	題名(画工・彫師等)	印刷者	刊行年	請求番号(*印は他機関収蔵)
<b>県内の社寺</b>						
1	図1	銅版	武州川越仙波喜多院(渡辺広方画・山崎芳翠刻)	精行社(東京)	明治28(1895)	行政文書 明2394-29
2	銅版	武州川越仙波喜多院[玉塚版](石田白龍画・小林桃山刻)	精行社(東京)	大正11(1922)	*泉立浦和図書館 S188セ	
3	銅版	埼玉県児玉郡貫木村大字金久保開雲寺之真景(石田呼友画・柳暗刻)	精行社(東京)	[明治30版](1897版)	行政文書 明2414-10	
4	図3	銅版	埼玉県児玉郡神保原村延喜式内古城吉坂稲天池上神社(石田呼友画・象童刻)	精行社(東京)	明治27(1894)	行政文書 明2376-1
5	図4	銅版	延喜式内調神社境内全図(皆川華岳写・縮図・彫刻)	成隆館(東京)	明治31(1898)	行政文書 明2372-15
6	図5	石版	大日本埼玉武蔵国秩父郡下手計村鹿島神社本末神主之図(尾高忠誠・高橋渡香画)	明治20(1887)	行政文書 大30-3	
7	図6	石版	武州不動ヶ岡之不動尊公園設定図	小泉印刷所(東京)	大正10(1921)	行政文書 大1225-5-7
8	図7	銅版	官幣大社氷川神社御改宮整分間真図(山田衛画)	玄々堂(東京)	明治14(1891)	岸田氏収集 7305
9	図8	石版	武蔵国官幣大社氷川神社行幸之図(興宗保録画・兼松正義刻)(石田呼友画)	精行社(東京)	明治33(1900)	西角井家 8186
10		木版	府県名所図会埼玉第一之宮氷川(三代東重画)			林家 10331
11	図9	木版	三峰山全図(森玄黄齋画・刻)	三峰神社		河野家11
12		木版	[三峰山十一面観音及び御眷願図](森玄黄齋画)	三峰神社		小室家 5977
13	図10	銅版	武蔵国秩父郡県社三峰神社全図(東清舎巴凌画・石井義雄刻)	精工組(東京)	明治21(1888)	田中家 1350
14	銅版	武蔵国秩父郡県社三峰神社全図[玉塚版](東清舎巴凌画)	精工社(東京)	明治38(1905)	*秩父宮記念三峰山博物館	
15	図11	銅版	官幣中社金鍬神社境内真景(空翠 石塚露園画)	精工社(東京)	明治35(1902)	岸田氏収集 7306
16	銅版	埼玉県南埼玉郡鷲之宮村鎮座鷲宮神社境内之全図	精工社(東京)	明治23(1890)	梶史CH 373-69	
17	図12	銅版	埼玉県北埼玉郡三保谷村大御山広徳寺全図(石田呼友画・渡辺広方縮図)	精工社(東京)		鈴木(庸)家 9352
18	図13	銅版	埼玉県入間郡高麗村高麗山聖天院境内全図(渡辺広方画・皆川華岳刻)	精工社(東京)		小室家 5624
19	銅版	埼玉県北埼玉郡不動岡村大字不動岡山峰山總願寺(酒井露白画・村上操山刻)	精工社(東京)	明治25(1892)	*国会図書館内複製デジタル	
20	銅版	埼玉県北埼玉郡大越村大字大越徳性寺(酒井露白画・木部晴山刻)	精工社(東京)	明治25(1892)	*国会図書館内複製デジタル	
21	銅版	埼玉県武州松山前崎神社境内全図(渡辺広方画・皆川華岳画)	精工社(東京)	明治29(1896)	*天理参考館	
22	銅版	武蔵国北葛飾郡高野村龍燈山永福寺境内全図(東清舎巴凌画)	文魁舎(杉戸町)		*個人蔵	
<b>県内の風景</b>						
→[博覧絵]・[博覧圖]収録作品は表四参照						
23	図14	銅版	[初代秩父橋][埼玉県児玉秩父西部新道事業報告書](烈山銅鏤・森父印工)		明治19(1886)	高野(作)氏 76
24	図15	銅版	私立埼玉英和學校(絵筆画)		昭和3(1928)	岡戸家 34
25	図16	銅版	埼玉県北葛飾郡高野村大字茨島野口(東清舎巴凌画・村上操山刻)	精工社(東京)		岸田氏収集 7307
26	銅版	埼玉県入間郡南谷村大字吉市場橋本三九郎邸宅之図(渡辺広方画・石井義雄刻)	精工社(東京)		*川越市立博物館	
27	銅版	水川公園高松楼高島之景				*個人蔵・[埼玉史談53巻第1号]
28	図17	石版	西吉見村百穴之図(皆川華岳写)			岸田氏収集 7128
29	図18	肉筆	足羽先生提安藤文沢雪行図(今川雷洲画)		[弘化3](1846)	小室家 6089
<b>名所を尋ねて</b>						
30	図19	銅版	東海道五十三翠 No.11(安田雷洲画)		天保15(1844)	小室家 5827
31	図20	銅版	上野国金洞山中之銀泉堂(森野殿画)	玄明堂(前橋)	[明治27](1894)	田中家 1351
32	図21	銅版	陸前国塩釜松嶋真景全図	盛光堂(仙台)	[明治28](1895)	土屋家(旧土蔵坊) 440
33	図22	銅版	松嶋塩釜真景全図	盛光堂(仙台)	大正3(1914)	中村(宏)家 419
34	図23	石版	陸前高山大仰禪寺眺望之全図	盛光堂(仙台)	明治30(1897)	田中家 1349
35	石版	松嶋全湾之図(保瑞会蔵版)(空原禮泉画)	伊勢斎助・益舟堂(仙台)	明治29(1896)	川田氏収集 6429・6430	
<b>名湯巡り</b>						
36	図24	石版	皇国第一之温泉九州熱海全図		[明治17](1884)	小室家 4708
37	図25	銅版	草津鉱泉場之図	玄々堂(東京)	[明治18](1885)	橋本明氏収集 2183
38	図26	石版	上州草津温泉全図	栄林堂(高崎)	明治29(1896)	鎌崎家 4355
39	図27	銅版	豆州修善寺温泉場全図	石橋初太郎(東京)	明治21(1888)	田中家 1352
40	図28	銅版	上野国四万温泉之真景(渡邊保画)	完全社(前橋)	明治22(1889)	鈴木(庸)家 9399
41	図29	銅版	上野国四万温泉之真景(着色版)(渡邊保画)	[完全社](前橋)	明治22(1889)	諸井(興)家 177
42	図30	銅版	上毛四方温泉真景	佐藤貞五郎(東京)		吉場敏夫氏収集 143
43	図31	銅版	上州伊香保鉱泉場名所全図	町楽堂(東京)	明治25(1892)	鈴木(庸)家 9400
44	図32	印刷	上州伊香保鉱泉場全景(菅野一筆写生・山内只七画作)	群山堂・昇陽舎	大正2(1913)	川田氏収集 1729
<b>社寺への参詣</b>						
45	図33	銅版	飯島神社之絵図	山口音二郎(京都)	明治11(1878)	小室家 4815
46	図34	銅版	京都伏見官幣大社稲荷神社之全図(渡辺広方画・兼松正義刻)	精行社(東京)	明治28(1895)	西角井家 9861
47	図35	銅版	善光寺境内并二逆傍名所図	中村活版所(長野)	明治30(1897)	杉田家 842
48	図36	銅版	[金澤稱名寺境内図]			田中家 1360
49	図37	石版	信濃国木曾御旗山全図(児野友助編)	竹倉健太郎(半田)	明治27(1894)	宇野家 2624
50	図38	石版	比叡山延暦寺家内全図(佐井紀俊覽著)	芝通太郎(京都)	明治44(1911)	中村(宏)家 666
51	図39	石版	筑前国太宰府神社之全景及十二景	黒田清麿(福岡)	明治35(1902)	中村(宏)家 450
52	図40	木版	成田山真景之図(森玄黄齋画)	天保5(1834)	小室家 4694	
53	図41	銅版	大日本帝国下総国成田山全図(佐々貴禮夢画)	醒夢堂(東京)	明治44(1891)	木村家 628
54	図42	銅版	改正成田山全図	慶雲堂(東京)	明治34(1901)	鈴木(庸)家 9398
55	銅版	改正成田山全図	慶雲堂(東京)	明治36(1903)	鎌崎家 4951	
56	図43	銅版	新刻改正訂正増補成田山全図	修進堂(東京)	明治29(1896)	鬼久保家 1017
57	図44	銅版	新刻改正訂正増補成田山全図	修進堂(東京)	明治36(1903)	川田氏収集 1455
<b>帝都東京</b>						
58	図45	銅版	東京横浜名所独案内図			高橋(岡)家 2939
59	図46	銅版	大日本帝国東京金龍山浅草寺之図(佐々貴禮夢画)	醒夢堂(東京)	明治21(1888)	足立家 913
60	図47	銅版	東京市実測明細全図	清水文蔵(東京)	明治28(1895)	鈴木(庸)家 9351
61	図48	銅版	改正東京全図	嵯峨野彦太郎(東京)	明治28(1895)	鈴木(庸)家 9370
62	図49	石版	大日本帝国御造幣之図	加藤兵太郎(東京)	明治21(1888)	高橋(岡)家 108
63	図50	石版	歩兵第三聯隊兵營之図	厚生堂(東京)	明治32(1899)	土屋家(旧土蔵坊) 435
64	図51	石版	東京勸業博覧会全図	嵯峨野平左エ門(東京)	明治40(1907)	川田家 1456
65	図52	石版	東京勸業博覧会全図	坂田万次郎(東京)	明治40(1907)	鈴木(庸)家 9359
66	図53	石版	明治神宮全景	大谷青山堂(東京)	[大正9](1920)	飯田氏収集 18
67	図54	写真製版	[教育掛図]東京二四 東京名所(其一)	三省堂		川田氏収集 10693
<b>教科書挿絵</b>						
68	図55	木口木版	帝国読本 巻之一 扉画 集英堂	学海指針社・集英堂(東京)	明治26(1893)	宇野家 2418
69	図56	木口木版	帝国読本 巻之二 扉画 まつり(浅井忠画・正巧刀)	学海指針社・集英堂(東京)	明治26(1893)	宇野家 2424
70	図57	木口木版	帝国読本 巻之三 扉画 日の出(小山正太郎画・正巧刀)	学海指針社・集英堂(東京)	明治27(1894)	飯野家 980
71	図58	木口木版	帝国読本 巻之四 扉画 天長節	学海指針社・集英堂(東京)	明治26(1893)	宇野家 2395
72	図59	木口木版	帝国読本 巻之五 扉画 武器(浅井忠画・金子政治郎刀)	学海指針社・集英堂(東京)	明治26(1893)	宇野家 2604
73	図60	木口木版	帝国読本 巻之六 扉画 動物園(五姓田芳樹(二世)画・正巧刀)	学海指針社・集英堂(東京)	明治26(1893)	宇野家 2694
74	図61	木口木版	帝国読本 巻之八 扉画 日本ノ三景(印藤良輔画・森山天龍刀)	学海指針社・集英堂(東京)	明治26(1893)	宇野家 2416
75	図62	木口木版	高等科用帝国読本 巻之五 扉画 内国勸業博覧会(森山天龍刀)	学海指針社・集英堂(東京)	明治27(1894)	宇野家 114
76	図63	石版	高等科用帝国読本 巻之六 扉画 憲法(五姓田芳樹(二世)画)	学海指針社・集英堂(東京)	明治27(1894)	安部家 109
<b>見立番付</b>						
77	図64	木版	明治十四年二月改東京大家見立備詩文書画一覽表	東花堂(東京)	明治14(1881)	川田氏収集 3152

文書館紀要第二十六号 (二〇一三・二)

### 三 『博覧図』について

#### (一) 『博覧図』の概要

明治二十年代から三十年代にかけて、関東地方・静岡・長野等を中心に、邸宅・寺社・店舗・工場・学校・官衙・名所などを俯瞰で描き、名称・地名などをローマ字で入れた『博覧絵』・『博覧図』と呼ばれる銅版画が盛んに製作された。日本博覧絵出版所、精行舎、精行社が製作し、版画集として販売もされた。版画集の名は、『大日本博覧絵』、『大日本博覧図』『日本博覧図』と三種類あるが、ここでは、『博覧図』という言葉に統一させていた。

『博覧図』については、横田洋一氏が、「横浜銅版画について―その特質と明治の印刷文化」(『横浜銅版画』 神奈川県立博物館編 有隣堂 昭和五十七年(一九八二)刊)で採り上げ、リストを掲載している。また、渡辺善司氏が、『博覧図』の出版をめぐって」(『千葉県中央博物館研究報告 人文科学 九巻二号』(千葉県立中央博物館 平成十八年(二〇〇六)刊)で刊行状況について整理されるとともに、明治二十六年(一八九三)の精行社との契約書を基にして、予約販売の方法を明らかにされている。また、現在、千田晃平氏、大谷弘幸氏が精行社の作品や『博覧図』について研究を進められており、本稿の執筆に当たっても多くの御示唆をいただいた。

渡辺氏の論文によれば、『博覧図』の製作方法は、以下のとおりである。発行者が注文主と契約を結び、画工が現場に向いて写生し、縮図を作製する。注文主は、描き入れる事物や人物なども注文することができ、実際、作品には、博覧会の受賞メダル、商標、広告、寺社の由緒書や碑文、漢詩や和歌・俳句、醸造所の樽、農作業の風景、

店舗の様子、人力車や汽車、参詣者、郵便夫、家族などが描き込まれている。校正を経た上で彫師が銅版に刻して完成する。そして、注文主には、最終的に、版画の外に、両面刷りの銅版画を二百頁ほど綴じた『博覧図』の版画集一冊と、版画五千部を印刷した後に、銅版の原稿も併せて納品された。事実、銅版画に描かれた旧家には、版画と版画集、原版がセットで残っている例が見られる。そして、この版画集は、一般にも書店を通じて販売されていた。

表二は、横田氏、渡辺氏の論文のリストを基に、千田氏、大谷氏の御示唆を得て、既出の『博覧図』を出版年順にリストアップし、関連資料を付したものである。しかし、これは、『博覧図』の一覧表としては、完全なものではない。『博覧図』は、第十二編まで刊行されており、第七編以降の編数は合うが、それ以前については編数が足りないからである。初編に関しては、『日本博覧図静岡県後編』(明治二十六年六月刊)の青山豊太郎の自叙に、「明治廿一年日本博覧図ナルモノヲ創始シ」とあり、明治二十一年(一八八八)に起点がある可能性が示されているが、詳細は不明であり、表には加えていない。

また、この表には、関連資料として、深満池銅版所からの連続性を考慮して、『東京商工博覧絵』と『横浜諸会社諸商店之図』を入れ、精行社が明治三十年代以降製作した『国乃誉』シリーズの千葉県分を所収した版画集『国乃誉』も加えた。これらについて若干説明したい。渡辺氏の論文でも述べられているが、精行社の規約は、それに先立ち、明治十年代末に深満池源次郎が経営する深満池銅版所(日本橋区本石町三丁目四番地)から刊行した東京の商家を描いた銅版画集『東京商工博覧絵第一編』(明治十六年(一八八三)十二月刊)、『同 第



表二 博覧図一覧表 (既出分) (\* 関連資料も含む)

編	書名	編輯・印刷・発行者(奥付)	刊行年月/定価	掲載地域・点数・博覧絵有無	題字・序文
*	東京商工博覧絵 第壹編	編輯出版: 深溝池銅版所(東京日本橋区本石町) 数次販売所	明治16年12月	東京(全108点)	題字: □□ 序: 雪花道人
*	東京商工博覧絵 第貳編上・下	編輯兼出版人: 平民深溝池源治郎(東京神田区淡路町志丁目廿番地) 彫刻印刷: 精々堂(東京日本橋区本石町三丁目廿四番地) 光刷: 日本博覧絵出版所(東京日本橋区本石町三丁目廿四番地) 「商工博覧絵附録東京全図」編輯出版: 深溝池銅版所(東京本石町三丁目二十四番地)	明治18年5月26日 25銭(2編下)	東京[全402点](複製版に拠る)	題字: 成島柳北序: 加藤瓢乎
*	〔横浜諸会社諸商店之図〕	〔編輯出版: 深溝池源治郎 深溝池銅版所(東京本石町三丁目)〕〔横田氏論文〕	不明[明治16~24年]	横浜・神奈川(121), 埼玉(1), 東京(1)(全123点)	なし
	大日本博覧絵	著者兼印刷兼発行人: 平民石原徳太郎(東京浅草区須賀町十八番地) 日本博覧絵出版所, 精工組・精行舎 (図中に「東京本石町三丁目日本博覧絵出版所銅製」, 「精工組 銅板彫刻 并印刷 東京小伝馬町三丁目廿番地」, 「東京須賀町精行舎印行」とあり 変遷が窺える。)	明治22年5月17日(国会本) 明治22年4月(神奈川県立公文書館寄託本)	群馬(45), 栃木(12), 福島(40), 山形(1), 宮城(2), 埼玉(3), 千葉(5), 茨城(16), 神奈川(20), 山梨(2), 静岡(10)(全156点) 枠: 「博覧絵章工標」博覧絵之章標「大日本博覧絵」桜の花と枝	序: 覺世道人 題字: 伊藤桂洲, 久永其穎 略述: 石原徳太郎
	大日本博覧図 栃木県之部	編輯者: 愛知県平民青山豊太郎(東京市神田区柳原川岸煉瓦二十号地寄留) 発行兼印刷者: 東京府平民秋谷樞之助(同所) 発行所: 精行舎(東京市神田区柳原川岸煉瓦二十号地) 日本博覧絵發行所	明治23年11月 2円	栃木(全200点)(内, 博覧絵6)	題字: 勝海舟序: 金井之恭, 青山豊太郎, 金玉均
	日本博覧図 静岡県 初編	編輯者: 愛知県平民青山豊太郎(東京市神田区柳原川岸煉瓦二十号地寄留) 発行兼印刷者: 東京府平民秋谷樞之助(同所) 発行所: 精行社(東京市神田区柳原川岸煉瓦二十号地)	明治25年4月25日 3円	静岡(全228点)(内, 博覧絵5)	題字: 勝海舟序: 角田真平, 井上喜左衛門, 青山豊太郎, 十洲松島吉平, 金玉均
第7編	大日本博覧図 第七編	編輯者: 愛知県平民青山豊太郎(東京市浅草区茅町二丁目三番地寄留) 発行兼印刷者: 東京府平民秋谷樞之助(東京市神田区富松町二番地) 発行所: 精行社(東京市浅草区茅町二丁目三番地)	明治25年12月 3円	東京(29), 埼玉(44), 茨城(62), 千葉(22), 群馬(29), 栃木(22)(全208点)(内, 博覧絵48(東京9 茨城2 千葉20 群馬17))	題字: 長三洲序: 金井之恭, 角田真平, 青山豊太郎
第8編	日本博覧図 静岡県 後編	編輯者: 愛知県平民青山豊太郎(東京市浅草区茅町二丁目三番地寄留) 発行兼印刷者: 東京府平民秋谷樞之助(東京市神田区富松町二番地) 発行所: 精行社(東京市浅草区茅町二丁目三番地)	明治26年6月 3円	静岡(全209点)(内, 再録68点)〔静岡県明治銅版風景集〕解説(内, 博覧絵1)	題字: 有栖川宮熾仁親王序: 末松謙澄, 青山豊太郎, 谷口藍田, 金井之恭
第9編	日本博覧図 千葉県之部 初編	編輯者: 愛知県平民青山豊太郎(東京市浅草区茅町二丁目三番地寄留) 発行兼印刷者: 東京府平民秋谷樞之助(東京市神田区富松町二番地) 発行所: 精行社(東京市浅草区茅町二丁目三番地)	明治27年9月30日 3円50銭	千葉(208)(内3点再録), 東京(1)(全209点)	題字: 徳川慶喜, 堀田正倫 序: 青山豊太郎
第10編	日本博覧図 第拾編	編輯者: 愛知県平民青山豊太郎(東京市浅草区茅町二丁目三番地寄留) 発行兼印刷者: 東京府平民秋谷樞之助(東京市神田区富松町二番地) 発行所: 精行社(東京市浅草区茅町二丁目三番地)	明治27年12月 3円50銭	東京(30), 神奈川(73), 埼玉(19), 栃木(22), 群馬(22), 静岡(26)(全192点)(内, 博覧絵14(東京4 神奈川4 静岡6))	題字: 大島圭介序: 金井之恭, 青山豊太郎
第11編	日本博覧図 千葉県之部 後編	編輯者: 愛知県平民青山豊太郎(東京市浅草区茅町二丁目三番地) 発行兼印刷者: 東京府平民秋谷樞之助(東京市神田区富松町二番地) 発行所: 精行社(東京市浅草区茅町二丁目三番地) 発行所: 精行社京都出張所(京都市下京区寺町通高辻上ル)	明治29年8月 3円50銭	千葉(190)(内, 17点再録)(全190点)	題字: 勝海舟, 東久世通禧 序: 島田三郎, 青山青桃(豊太郎)
第12編	日本博覧図 第拾貳編	編輯者: 東京府平民青山豊太郎(東京市浅草区茅町二丁目三番地) 発行兼印刷者: 東京府平民秋谷樞之助(東京市神田区富松町二番地) 発行所: 精行社(東京市浅草区茅町二丁目三番地) 発行所: 精行社京都出張所(京都市下京区寺町通高辻上ル)	明治30年4月 3円50銭	東京(4), 神奈川(4), 千葉(19), 茨城(30), 山梨(5), 長野(103), 静岡(1), 愛知(3), 京都(1), 大阪(4), 香川(29)(全203点)	題字: 東久世通禧, 佐野常民 序: 青山青桃(豊太郎)
*	国乃誉	編輯兼発行人: 青山豊太郎(東京市浅草区茅町二丁目三番地) 印刷兼発行所: 精行社(東京市浅草区茅町二丁目三番地) 電話浪花九百八十六番 発行所: 精行社京都出張所(京都市下京区寺町通高辻上ル), 発行所: 精行社横浜出張所(横浜市戸部百十八番地)	明治31年8月15日 3円50銭	千葉(全219点)(新規36点, 183点は再録)	題字: 東久世通禧, 佐野常民 序: 青山青桃(豊太郎)

\* 本表は, 横田洋一氏, 渡辺善司氏の論文を基に作製し, 「東京商工博覧絵」と「横浜諸会社諸商店之図」を加えた。

\* 千田晃平氏より, 資料収蔵機関情報及び静岡県後編の題字・序・目次・奥付の提供を受けた。

\* 千葉県之部, 国の誉の点数は, 大谷弘幸氏「銅版画にみる明治の千葉県」(2010年3月)に拠る。

\* 静岡県後編の点数は, 「静岡県明治銅版風景集」解説に拠る。

二編上・下(明治十八年(一八八五)五月刊)の規約とほぼ同じである。また、『東京商工博覧絵』については、「博覧絵」という書名の部分が

『大日本博覧絵』(明治二十二年(一八八九)四月刊)と同じであり、『東京商工博覧絵』第二編下の奥付にある「編輯兼出版人 深満池源次郎、彫刻印刷精々堂、売捌 日本博覧絵出版所」の内、売捌の「日本博覧絵出版所」、及び精行組・精行舎・精行社と似た名前の彫刻印刷の「精々堂」の名が、『大日本博覧絵』奥付にある発行人石原徳太郎の略述の傍線部分と重なり、両者の連続性を示すと考えられる。

「一、今回出版仕候原書ハ、日本博覧絵出版所、及ヒ精工組、及ヒ精行舎ガ御締約相願タルモノヲ以テ、合綴仕候モノナレバ、図画及ヒ銅鑄ノ技術上多少ノ差違アルノミナラス、出版所ガ御締約相願候部分ノ版面ハ、該竣工今ヲ距ル三、四年前ノモノ多キガ故ニ……(中略)……今回ノ製本ヲ基トシ、茲ニ一大改革ヲ加ヘ、年一回宛必ス出版可仕ノ計画モ相立候間(以下略)」

この記述からは、深満池銅版所、彫刻印刷の精々堂、売捌の日本博覧絵出版所の関連性が窺える。版画制作が深満池銅版所から日本博覧絵出版所へと受け継がれ、そこでの制作が遅延し、精々堂が精工組となつてそれを引き継ぎ、その後、精行舎に発展したとも考えられるが、類推の域を出ない。

また、神奈川県立博物館に、『博覧図』と同様の図版を綴じた『横浜諸会社諸商店之図』がある。この書名は便宜上の書名で、正式に製本された本のタイトルではなく、序文や奥付もない。この資料については、横田氏が前掲の論文で詳しく述べているが、画の中に『東京商工博覧絵』を刊行した「深満池銅版所」が登場しており、画の描き方

にも共通性があるため、関連資料として表に加えた。この『東京商工博覧絵』と『横浜諸会社諸商店之図』の二種類の資料と、『博覧図』との関連性については、千田氏からも御示唆をいただいた。

表二の項目は、『博覧図』の編数、書名、奥付の編輯・印刷・発行者名と住所、刊行年月、定価、掲載地域、図版点数、博覧絵の有無、題字と序の作者、画工(本名と署名・落款)、彫師(本名と署名・落款)、収蔵機関、復刻版の書名である。

地域、博覧絵の有無、画工や彫師については、『博覧図』の図版の一点ごとの地域、博覧絵の枠の種類、画工名(署名・落款)、彫師名(署名・落款)を採録し、集計した。千葉、静岡については復刻版の図から採録したが、予約者一覧表により、初編・稿編を分けて処理した。なお、千葉県分については、大谷弘幸氏作成の図版データと照合させていただいた。

## (二) 『博覧図』の発行所・代表者について

発行所の住所、代表者、社名、販売所については表二に示したが、それに、前述した一枚物の情報も加えると、以下のとおり整理できると。①東京本石町三丁目二十四番地(深満池源次郎、深満池銅版所、精々堂、日本博覧絵出版所) ↓ ②東京浅草区須賀町十八番地(石原徳太郎、精行舎、精行組、日本博覧絵出版所) ↓ ③同所、(桑原武吉、精行組) ↓ ④東京小伝馬町三丁目老番地(川喜田松蔵、精工組銅版部) ↓ ⑤東京市神田区柳原川岸煉瓦二十号地(青山豊太郎、秋谷樫之助、精行舎) ↓ ⑥東京市浅草区茅町二丁目三番地(青山豊太郎、秋谷樫之助、精行社)。

代表者は深満池源次郎↓石原徳太郎↓桑原武吉↓川喜田松蔵↓青山豊太郎・秋谷樞之助と替わっている。(③と④の桑原武吉、川喜多松蔵は、前述の三峰神社の『日鑑』と、『武蔵国秩父郡県社三峰神社全図』(図10)(明治二十二年(一八八八)刊)に拠る)。横田氏は前掲の論文で、「印刷所の経営者は銅版画家として一流の腕を持つ技術者である場合が多かった」と述べているが、これらの経営者もその可能性がある。

また、精行社の代表者をめぐる他の手掛かりとして、東京都公文書館の印刷関係の史料を併せて見ていきたい。<sup>41)</sup>同館が収蔵する明治期の行政文書中には、精行社や青山豊太郎に関する記事が、同業組合関連史料にいくつか見受けられる。明治二十五年(一八九二)九月三日に認可された佐久間貞一総代の東京石版印刷業組合の規約書には、「神田区柳原町川岸二十号 精行社 秋谷樞之助」と、秋谷樞之助の名が代表者として挙がっている(請求記号 D621 B2)。

山口駒次郎が明治三十年(一八九七)七月十七日に出した「東京銅版印刷業組合組織認可願」には、「今般東京府下拾五区ノ銅版印刷業者中協議ヲ遂ケ、一方には不正印刷物ノ受負ヲ予防シ、一方ニハ衰頽セル本業ノ挽回ヲ計リ、更ニ進歩発達ヲ期シ、普ク社会ノ需要ニ応シ兼テ本業ノ信用ヲ維持セントシ、(後略)」とあり、明治三十年(一八九七)には既に銅版印刷が衰退している様子がみてとれる(622 C5)。明治三十年(一八九七)十一月二十九日の「東京石版印刷同業組合設立発起人認可申請書」の申請人には、「浅草区茅町二丁目三番地在住 青山豊太郎」とあり、「青山豊太郎章」の印が押印されている(622 A7 12)。同じ簿冊には、明治三十年(一八九七)十二月二十八日に浅草区长杉本喜兵衛が東京府内務部長鈴木米三郎に提出

した文書中に、「浅草区茅町二丁目三番地在住 青山豊太郎 一、石版及び銅版印刷業一ヶ年己上ヲ営ム」とあり、「東京石版印刷同業組合設立発起人身体元調(重要輸出品 三十年十二月)」にも、「石版銅版一ヶ年以上従事 青山豊太郎」とある。

そして、今回の調査で、明治三十二年(一八九九)十二月十三日付で、青山豊太郎の東京石版印刷同業組合評議員の辞任届(623 C5 2)があることが分かった。

「辞任届 浅草区茅町二丁目三番地 青山豊太郎

右之者儀、本組合評議員就任中之処、今般同人実弟青山瀧三郎へ業務一切相譲候段申出、辞任仕候間、此段御届申候也

明治三十二年十二月十三日 東京石版印刷業組合 組長玉置源太郎  
農商務大臣皆補荒輔殿」

明治三十二年十二月に、青山豊太郎が実弟青山瀧三郎に業務一切を譲り、東京石版印刷組合の評議員を辞任したとある。この届は、青山豊太郎の精行社における引退を窺わせる。千田氏の調査によれば、これ以降の精行社の一枚物の版画作品には、明治三十六年位までは青山豊太郎の名が続くが、その後、青山と共に経営に当たっていた秋谷樞之助へと切り替わっていくとのことである。但し、辞任届にある青山瀧三郎の名は、作品には登場しないという。正式に秋谷が引き継ぐまで、青山瀧三郎はそのまま豊太郎の名を使ったとも考えられるが、詳細は不明である。

明治末の代表者については、精行社の明治四十年(一九〇七)六月一日発行の図書である『東京勸業博覧会案内』(国会図書館の近代デジタルライブラリー)に、「編輯兼発行者 東京市浅草区茅町式丁目

参番地 秋谷梅之助」、「印刷者 同所精行社代表者 秋谷梅之助」とあり、前述の大正四年(一九一五)刊行の銅版画『武州川越仙波喜多院』にも発行者秋谷椽之助(秋谷梅之助)、印刷者本田精志とあることから、精行社の経営は、秋谷梅之助が青山豊太郎を継いで担っていたことが分かる。なお、千田氏から、一枚物の銅版画作品に明治末から大正期にかけて、一時期、青山麟太郎の名があるとの御教示を得たが、この人物は名前から見て、青山豊太郎の親族であると推測される<sup>42)</sup>。

### (三) 『博覧図』の画工、彫師について

『博覧図』を手がけた画工は、画に記された署名から見ると多人数に見えるが、実際には、一人の画工が多くの号や名を使い分けており、照合するとその数は絞られる。表二には各巻ごとの画工名を記したが、管見した範囲内での画工の主な号や別名の推定は以下のとおりである。

霜鳥晴(東涛舎・巴凌・洗崖漁叟・南漣亭)、土方力(雲外・砧里)、秋谷梅之助(秋谷椽月・A.M.調静園主人)、清水霞峯、酒井露白、石田孝友(石田呼友・孝多・孝友・孝各舎友仙山人・呼友・春風舎呼友・冬友山人孝友・冬遊舎呼友・白龍軒呼友・白龍舎集雲・宝集舎呼友)、折井太一郎(愚斎・愚斎閑人・山人・T. Orii・梁岳・梁溪折井・梁溪漁長・梁溪漁夫・梁岳樵夫)、加藤芳雄(雨林・K.Y.山東野人・松溪・探真・菱洲・芳霖・斐太之人・ひだの人・Y. Kato)、小林英次郎(幾英・一朝斎幾英・小林・春舎幾英・柏叟子)、林露光(H.R)、竹岡衛秀(淡海・金亀城南之人・翠湖・せうしき・竹岡曉斎・衛秀・もりひで)、渡辺広方(小舟)、その他に、笑亭、桂古、春江、省年(醉堂)、捨華(採芳園)などがあるが、この中には前出の画工の別号が

混じっている可能性がある。総じて十数名であり、後述する精行社の広告にもあるように、画工は巻を追って若干名を増やしている。

表三(1)は、画工の一覧表である。重複した図を含めた『博覧図』の図版全体から、署名のあるものを抽出したものであり、正確な製作点数にはならないが、各画工の製作分量の割合や製作時期が概観できる資料として挙げた。また、表三(2)は、その中から、十点上の製作点数がある画工を、製作数順に並べたグラフである。

草創期から活躍していた画工霜鳥が抜きん出て多くの図を製作しており、次いで、加藤、土方、石田が主要な画工であった。製作数は、渡辺、竹岡、秋谷、小林、折井がそれに続いている。製作の時期としては、栃木県を手掛けた霜鳥・秋谷・土方・清水が当初からのメンバーであり、その後、精行社の『博覧図』の注文の増加と対象地域の拡大と共に、酒井・石田・折井が加わり、千葉を手掛けた時期には加藤・小林が活躍している。渡辺や竹岡も、後から参加した画工である。

画工は夫々地域を担当して写生旅行を行い、それを基に縮図を行った。そのため、写生の年月日や季節が記されている図を追っていくと、その画工の写生旅行の行程を辿ることができる。画工は、後述する精行社の広告にもあるように、注文があれば遠隔地にも写生に向いており、京都や四国にも旅行した。また、『博覧図』以外の大判の一枚物の社寺境内図なども手掛けているため、前述した三峰神社の「日鑑」に記録が残っていたように、銅版画を製作させた各地の神社には画工滞在の記録が残っている可能性がある。また、個人宅の日記や書簡にも、関連する記録があると思われる。

初期の段階から多くの画を描き続けてきた霜鳥晴(東涛舎巴凌)に

表三 『博覧図』画工・彫師一覧表

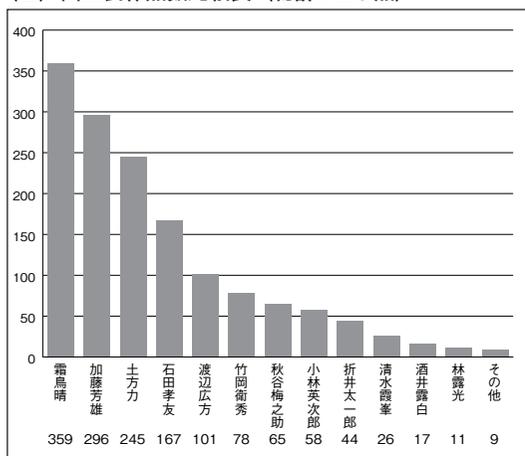
(1) 画工一覧表

書名	博覧絵	栃木		静岡初		7編		静岡後		千葉初		10編		千葉後		12編		国乃餐	
		関東東北中部	静岡	栃木	静岡	関東	静岡	千葉	関東静岡	千葉	長野	関東	関西	香川	千葉	千葉	千葉	千葉	千葉
画工名	点数	明23.5	明23.11	明25.4	明25.12	明26.6	明27.9	明27.12	明29.8	明30.4	明31.8								
霜鳥晴	359	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○								
秋谷梅之助	65		○	○	○	○	○	○	○	○	○								
土方力	245		○	○	○	○	○	○	○	○	○								
清水霞峯	26		○	○	○	○	○	○	○	○	○								
酒井露白	17				○				○										
石田孝友	167						○	○	○	○	○								
折井太一郎	44						○	○	○	○	○								
加藤芳雄	296							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
小林英次郎	58							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
林露光	11							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
笑亭	1								○										
竹岡衛秀	78									○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
渡辺広方	101										○	○	○	○	○	○	○	○	○
省年	5																		
桂古	1																		
春江	1																		
捻華	1																		
小計	1476点	1人	4人	4人	5人	6人	6人	10人	7人	12人	7人								

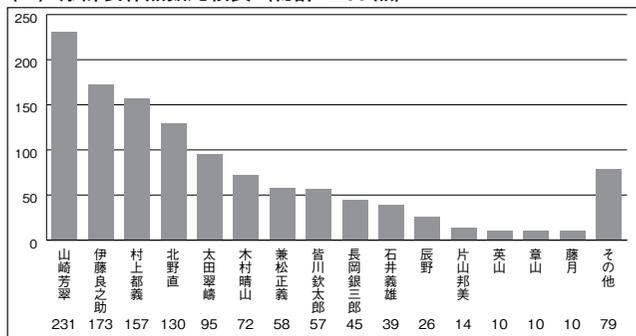
(3) 彫師一覧表

書名	地域	点数	栃木		静岡初		7編		静岡後		千葉初		10編		千葉後		12編		国乃餐	
			栃木	静岡	関東	静岡	千葉	関東静岡	千葉	千葉	千葉	千葉	千葉	千葉	千葉	千葉	千葉	千葉	千葉	千葉
彫師名	点数	明23.11	明25.4	明25.12	明26.6	明27.9	明27.12	明29.8	明30.4	明31.8										
山崎芳翠	231	○	○	○	○	○	○	○	○	○										
伊藤良之助	173	○	○	○	○	○	○	○	○	○										
村上郁義	157	○	○	○	○	○	○	○	○	○										
太田翠崎	95	○	○	○	○	○	○	○	○	○										
木村晴山	72	○	○	○	○	○	○	○	○	○										
辰野	26	○	○	○	○	○	○	○	○	○										
蘭江	5	○	○	○	○	○	○	○	○	○										
翠洞	4	○	○	○	○	○	○	○	○	○										
服部	3	○	○	○	○	○	○	○	○	○										
大塚	1	○	○	○	○	○	○	○	○	○										
淡齋	1	○	○	○	○	○	○	○	○	○										
北野直	130			○	○	○	○	○	○	○										
片山邦美	14		○	○	○	○	○	○	○	○										
中村藤吉	8			○	○	○	○	○	○	○										
泉	1		○	○	○	○	○	○	○	○										
中野	4		○	○	○	○	○	○	○	○										
佐伯	1		○	○	○	○	○	○	○	○										
谷	1		○	○	○	○	○	○	○	○										
中村月嶺	1			○	○	○	○	○	○	○										
龍蹊	2			○	○	○	○	○	○	○										
龍蹊	1			○	○	○	○	○	○	○										
玄々堂龍山	1			○	○	○	○	○	○	○										
照郷	1				○	○	○	○	○	○										
山人	2				○	○	○	○	○	○										
兼松正義	58										○	○	○	○	○	○	○	○	○	
皆川欽太郎	57										○	○	○	○	○	○	○	○	○	
英山	10										○	○	○	○	○	○	○	○	○	
章山	10										○	○	○	○	○	○	○	○	○	
吟海	5										○	○	○	○	○	○	○	○	○	
緑溪	3										○	○	○	○	○	○	○	○	○	
未井	2										○	○	○	○	○	○	○	○	○	
琴海	2										○	○	○	○	○	○	○	○	○	
千載	1										○	○	○	○	○	○	○	○	○	
新井	1										○	○	○	○	○	○	○	○	○	
美登利	1										○	○	○	○	○	○	○	○	○	
翠峰	1										○	○	○	○	○	○	○	○	○	
梅月	1										○	○	○	○	○	○	○	○	○	
翠山	1											○	○	○	○	○	○	○	○	
石井義雄	39																			
長岡銀三郎	45																			
秋晚	5																			
藤月	10																			
秋月	9																			
醉生	2																			
翠藤	1																			
青山藤山	1																			
翠仙	1																			
金城	1																			
吉田芳翠	3																			
武下嘉一	1																			
計	1206点	11人	14人	13人	11人	20人	15人	15人	16人	15人										

(2) 画工製作点数比較表 (総計 1476 点)



(4) 彫師製作点数比較表 (総計 1206 点)



ついで、立花義彰氏の『静岡近代美術年表稿 明治編(上)』に、『東海晚鐘新聞』の明治二十四年(一八九二)十二月十五日の記事として「霜鳥巴凌、油絵コンテ画応需」とその名があることから、油絵をも

のする画工であることが分かる。また、霜鳥は、明治三十年(一八九七)

六月刊行の『鎌倉江の島手引草』の画を描いているが、奥付には、

「編輯兼発行印刷者 東京市芝区田村町七番地平民 霜鳥晴

印刷者 同市浅草区茅町二丁目三番地 精行社

専売所 神奈川県鎌倉字長谷五百五十番地 矢野主水

大売捌 同鎌倉町雪下ノ八幡前通り 大石平左衛門」

と住所があり、この本では編輯兼発行印刷者としての名がある。

霜鳥は前出の三峰神社の『日鑑』によれば、明治三十八年(一九〇五)三月の時点でも精行社々員の画工として活躍していたことが明らかであるが、千田氏から、大正十三年(一九二四)に瑞巖寺が刊行し

た『陸前松嶋諸嶋瑞巖寺全図』(野村銀次郎印刷)の画も霜鳥が手がけているとの御教示を得た。

秋谷椽月は、『大日本博覧図』〔第七編〕(明治二十五年(一八九二)

十二月刊行)の奥付に、「発行兼印刷者 東京府平民 秋谷椽之助

東京市神田区富松町二番地」とある秋谷梅之助と同一人と推定され、

画工でもあるが、精工社の編輯・経営に関与していることが窺える。

秋谷は青山と共に精行社を経営し、後に代表となっていく。

愚斎、梁岳と署名された画には、「T・O・r・i・i」の署名が併せて記されたものがあることから、洋画家であり俳人でもあった岡山出身

の折井愚哉(一八七〇〜一九三四)であることが分かる。折井愚哉は、

本名太一郎、別号無筆堂・百兆・梁岳等で、大阪の私立専修学校に学

び、小山正太郎に洋画を、橋本雅邦に日本画を、俳句を正岡子規に学んだ。大阪朝日新聞社で画筆をとり、郷土岡山の中学で教鞭もとる。後に渡米して絵画の研究をし、帰国後愚哉会を組織した。『相模百

景』『小学校画心得』等の著書があり、『禪房対局図』は著名である。

小林の落款を持つ幾英については、大谷氏から、芳幾の門人の錦絵

の絵師、一朝斎幾英(小林英次郎)であることを御教示いただいた。

大谷弘幸氏の「銅版画にみる明治の千葉県」(平成二十二年(二〇一〇)三月)に詳細が記されている。

その外、翠湖と号する竹岡衛秀は淡海金亀城南之人とあることから、

琵琶湖のある滋賀県ゆかりの画家であると推測される。また、千葉県

の図版を中心となって手掛けた加藤芳雄は、落款に斐太之人とあるの

で岐阜県ゆかりの画家であろう。

埼玉の『博覧図』を描いた画工は、酒井露白、秋谷梅之助(秋谷椽

月)、霜鳥晴(霜鳥巴凌)、石田孝友(石田呼友)、土方力の五名である。

彫師についても画工同様に表二に各巻ごとの彫師を示し、表三

(3)に『博覧図』全体から、署名のある図版を抽出して一覧表を作

製した。また、表三(4)は、十以上の点数がある彫師の点数の比

較表である。彫師のほとんどは落款がないため、本名の推定が困難で

あるが、常に、画工よりも多い人数の彫師を抱えていたことが分かる。

草創期からの彫師で彫刻数が多いのは、山崎芳翠、伊藤良之助

(良・暁山・翠峰・翠岑)、村上都義(村上椽山・MURAKAMI・象童)、

太田翠嶂、木村晴山(龍雲堂)の五名である。この内、伊藤良之助に

ついては、一枚物の作品『西新井村五智山総持寺全図』の銅版原画が

足立区立郷土博物館で常設展示されており、その丹念な彫りを見るこ

とができる。その後、静岡県で北野直(至誠・KN・NK)が、千葉県之部で兼松正義(柳塘・江左亭)が加わり、多くの作品を彫っている。次いで点数の多い皆川欽太郎(皆川華岳)、長岡銀三郎(嘉雲洲・長岳・長陵)も千葉県之部から参加した彫師である。この内、皆川は画工としても活躍している。前述の、『延喜式内調神社境内全図』(図4)(行政文書 明三三七二一五)には、臨写縮図彫刻東京成隣館員皆川華岳とあり、全ての工程を一人でこなしている。石版画『西吉見村百穴之図』(図17)(岸田氏収集 七二二八)も皆川の画である。彫師の仕事は画を描く作業に通じるものがあり、皆川は、彫師が画工を兼ねた例である。

石井義雄(江東・よし雄)も『博覧図』は千葉県之部からだが、前述の『武蔵国秩父郡県社三峰神社全図』(図10)(田中家 一三五〇)に名があり、既に、明治二十一年(一八八八)の精工組の時代に、進々堂門人石井義雄として彫刻に当たっていたことが分かる。

辰野、片山邦美(紫紅)、藤月、英山、章山も十点以上を彫刻している。他には、蘭汀、翠洞(漣雪堂)、服部、大屋、淡齋、中村藤吉、泉、中野、佐伯、谷、中村月嶺、龍躍、龍蹊、玄々堂龍山、照郷、山人、吟海、緑溪、永井、岑海、千載、新井、美登利、翠峰、梅月、翠山、秋暁、秋月、醉生、翠藤、青山藤山、翠仙、金城、吉田芳翠、武下嘉一らの名があるが、本名と号を絞って切れていない。

この内、埼玉の『博覧図』を手がけた彫師は、伊藤良之助、太田翠嶂、北野直、木村晴山、辰野、村上都義、山崎芳翠、龍躍、龍蹊である。画工と彫師の関係を見ていくと、画工が特定の彫師とだけ組むことはなく、仕上がった縮図を次々に彫刻していったと思われる。

#### 四 埼玉を描いた『博覧図』

表二に示した『博覧図』や関連資料の内、『横浜諸会社諸商店之図』(出版年不明)には一点、『大日本博覧図』(明治二十二年(一八八九)四月刊行)には三点、『大日本博覧図』(第七編)(明治二十五年(一八九二)十二月刊行)には四十四点、『日本博覧図 第拾編』(明治二十七年(一八九四)十二月刊行)には十九点の埼玉県内を対象とした作品が含まれており、その数は重複四点を除くと六十三点に上る。そこで、表四には、埼玉県内を描いた作品の題名や地名、画工や彫師、掲載されている市町村史名等をリストアップした。また、表末には、本稿の前半で採り上げた、版画集に掲載されていない埼玉を描いた一枚物の精行舎及び精行社の作品を加えた(表四参照)。

次に、埼玉が描かれた『博覧図』を掲載する各巻について見ていくが、序文・奥書・広告等についても、『博覧図』の特質や精行社の経営等が窺われる資料として、併せて紹介していきたい。

##### (一) 『横浜諸会社諸商店之図』(出版年不明)

『横浜諸会社諸商店之図』については前述したとおりであり、『横濱銅版画』(神奈川県立博物館編 有隣堂 一九八二年刊)に所収されている。この中に、一点だけ埼玉県を描いた作品『武蔵国児玉郡渡瀬亀屋原太平』が含まれている。横濱で生糸商として大成功した原善三郎が、横濱の亀屋と野毛山の別荘に加えて、郷土である児玉郡渡瀬村(現神川町)で絹商を営む親戚の原太平の店舗を併せて作製させたのである。土蔵が連なる店舗、店頭客、荷を積む馬車、人力車、屋敷の中の人などが、細かく描き込まれている。

(二) 『大日本博覧絵』(明治二十二年四月刊)

『大日本博覧絵』は明治二十二年(一八八九)四月に刊行され、群馬、栃木、福島、山形、宮城、埼玉、茨城、千葉、神奈川、山梨、静岡の銅版画が掲載されている(表二参照)。この本は、国立国会図書館の近代デジタルライブラリーでインターネット公開されている。

まず、嘉永六年(一八五三)に『瓊国論附尾』に緒言を記した覚世道人が、博覧絵の多様な対象と有益性について序を寄せている。

「大日本博覧絵序」

泰西ノ學術日ニ月進ミ。従ツテ事物ノ変化スル。又速ナリ。故ニ。吾國ノ如キ。近時其面目ノ一新スルコト。是レ將ニ。人智発達ノ秋ト言フヘシ。然ハ即チ山河ノ如キ。海陸ノ如キ。丘嶽開鑿ニ就事為スコト。万民ヲシテ其便ナラシムルハ。蓋シ。鉄道。汽船。電信。瓦斯。郵便。等。其他。枚挙ニ遑アラス。依之。是レヲ看レハ。世人ノ大業ヲ起サント欲スル者ハ。皆。新ヲ競ヒ。奇ヲ争ヒ。以テ国ニ尽スノ義務ヲ達セント。或ハ外航ニ志シ。或ハ文学ニ志シ。或ハ技術ニ志シ。或ハ美術ニ志シ。或ハ貿易商業上ニ熱心シ。思想ヲ腦裡ニ納メ。而シテ。智ヲ絞リ。勞ヲ省メ。策ヲ万里ノ異境ニ取ルモノ。吾彼ト共ニ憩ンスルナシ。茲ニ至ツテ始メテ文明ノ域ニ達シ。事物ノ変化。亦。旧習ヲ脱スルヲ得タリ。之レ何ノ故ゾ。即チ善良完全ナル。精功美術品ヲ作り。海外ニ輸出シ。以テ日本ノ名譽ヲ光輝為サント欲スルニ有リ。夫レ如斯ニシテ真ニ此図画タルヤ。日本全国ニ冠タル紳商。製造家。旅館。温泉地。商家。器械運轉場。会社。学校。郡役所。神社。仏閣。等ヲ。緻密鮮明ニ摸写シ。而シテ。之ヲ銅携ニ刻シ。世人ノ便宜ト為ス。予。閱スルニ真ニ此図画ノ緻密鮮明ニシテ尚且ツ。家屋ノ構造タルヤ。実

ニ真ヲ写シシ其処ニ至リテ目撃スルカ如ク。其盛大。繁栄ナル。景況。

鈍筆ノ。能ク之ヲ尽ス能ハサル者ニシテ。深ク賞スルニ足ルヘシ。故ニ。名ヲ。社会ニ博サント欲スル諸君ハ必ス一本ヲ閲覽シ。以テ吾全国ニ冠タル人々ノ盛大ヲ看ハ。心身自ヲ発達シ。一ハ以テ我全国ノ勝地ヲ知ラシム一ハ以テ漫遊者ノ便ニ供シタルモノニシテ。其実況ヲ座シテ見ルニ同シ実ニ有益ニシテ既テニ。事業ニ就キテ。其得策。其可否。如何ヲ推究スル一助トナランコト。予カ空言ナラヌト。爾云

明治廿二年四月中旬

覚世道人漫記」

その後、書家の伊東桂洲の「富国 桂洲生書」と、同じく書家の久永其穎の「進徳脩業 其穎散史」の書が掲げられている。

『博覧絵』の特徴は図版の枠にあり、桜の花型や幾何学模様丸の中に、「大日本博覧絵」「博覧絵之章標」「博覧絵章工標」の六文字を入れ込んだ図枠が付けられている。また、「桜の花と枝の絵」を図枠に入れているものもある。その後刊行された『博覧図』の中にも、博覧絵の枠がある図が含まれているが、これらは、その版画集の中でも、製作時期が早いものといえよう。

また、博覧絵の枠のある図版には、画工や彫師の名は入っていないが、この『大日本博覧絵』の中では唯一、「前橋監獄 明治二十一年三月三十一日竣工」の図にだけ、東涛舎巴凌(霜鳥晴)の署名がある。製作にあたっては、写生の他に、建物の配置や間取りを示す「間取図」や「家相図」、既存の写真なども材料に使われたようである。福島県立史料館の『福島県史料情報 第二十七号』には、『大日本博覧絵』に掲載された須賀川産馬会社の銅版画の基となった写真が残っていることが紹介されている。

画は正射法で描かれたものが多く、線が固い印象を与える。また、絵の描き方や彫りに統一感が欠けているが、この理由については、奥付に付された発行人石原徳太郎の略述に記述されている。

「明治廿二年五月十日印刷

同月十七日出版

著者兼印刷兼発行人 東京浅草区須賀町十八番地

平民 石原徳太郎

#### 略述

一、今回出版仕候原書ハ、日本博覧絵出版所、及ヒ精工組、及ヒ精行舎ガ御締約相願タルモノヲ以テ、合綴仕候モノナレバ、図画及ヒ銅鑄ノ技術上多少ノ差違アルノミナラス、出版所ガ御締約相願候部分ノ版面ハ、該竣工今ヲ距ル三四年前ノモノ多キガ故ニ、目的ノ本主トスベキ御建築物ニモ御改造等アリテ、現今トハ其位置ノ異リタル向モ不尠、此事業上不本意ノ至リニ候得共、今更如何トモ致方無之、只々各位ニ向テ奉深謝ノ外無之、幸ニ御許シ賜ランコトヲ奉是祈候、謹言

附言、今回出版仕候博覧絵事業ノ義、愈各位ノ御高呼ヲ博シ、御加盟申込モ続々有之候ニ付、今回ノ製本ヲ基トシ、茲ニ一大改革ヲ加へ、年一回宛必ス出版可仕ノ計画モ相立候間、官衙、家屋、社寺、堂宇、其他何タルヲ論ゼズ、社会ニ広告センコトヲ希望セラル、ノ各位ハ、御加盟御締約被下度奉祈候也

#### 広告

- 一、銅版彫刻印刷
- 一、石版彫刻印刷
- 一、木版類彫刻印刷
- 一、活版類印刷

右八年来ノ本業ニシテ益各位ノ御愛顧ヲ蒙リ、御注文向モ月二年二増加仕候間、此際尚一層ノ改良ヲ加へ、職工モ妙技巧術ナルヲ備シ、都テ新規新按ノ図画ヲ巧ミ、従前ヨリ一際美麗ナルモノヲ廉価ニ調製仕候間、多少ニ不抱、御用向仰付被下度奉希上候

石原徳太郎 敬白

石原は、「今回出版仕候原書ハ、日本博覧絵出版所及ヒ精工組及ヒ精行舎ガ御締約相願タルモノヲ以テ合綴仕候」と述べ、画の書き方に差異が生じていることを断っている。そして、三、四年前の注文分が遅れて刊行されることを詫びている。この石原の略述に、深満池銅版所、彫刻印刷の精々堂、売捌の日本博覧絵出版所との関連性が窺えることについては、前述したとおりである。

石原は、今後の版画集の定期的な出版計画についても述べているが、その後、青山豊太郎により、『博覧図』が逐次刊行されていくことになる。また、石版、木版、活版印刷等、幅広い業務を取り扱っていることも宣伝している。

埼玉を描いた図は三点だけで、北葛飾郡八甫村（現久喜市）の渡邊義意智宅、北埼玉郡加須町（現加須市）青竊買次問屋清水善兵衛の店舗、北埼玉郡加須町（現加須市）で「かんの薬」を販売していた大和門次の薬局である（表四参照）。

実際には両側に、隣の店や邸宅があるのだが、図では、両側の部分を雲を使って省略し、該当する店舗や邸宅だけを描いている。実際には見えない部分も描かれているのである。間口は狭いが、敷地が奥に深く広がり、蔵が立ち並んでいる当時の店舗の特徴がよく分かる作品である。画工や彫師の名は記されていない。

(三) 『大日本博覧図』【第七編】(明治二十五年十二月刊行)

この『大日本博覧図』【第七編】は、明治二十五年(一八九二)十二月に刊行され、埼玉県内を描いた銅版画を最も多く含む版画集であり、国立国会図書館の館内閲覧のデジタル資料で閲覧・複写できる。

巻頭には、明治の書家の第一人者長三洲<sup>(45)</sup>の書で、銅版画集にふさわしく、中国晩唐の張彦遠の画論『歴代名画記』から「成教化、助人倫、窮神變測幽微、与六籍同功、四時並運、発於天然、非由述作」の言葉が掲げられている。なお、冒頭の「夫画者」は略されている。

精行社は『博覧図』中の広告にもあるように、有名書家の揮毫の軒旋や、東京習字会の受付も行っており、多くの書家と繋がりを持っていた。そのため、『博覧図』の各巻の題字も、勝海舟を始め、当時の有名な書家が起用されている。

続いて、衆議院議員で俳人でもある角田真平<sup>(46)</sup>が、序を述べる。

「日本博覧図序、古哲又訓云、観国之光利用資于王、夫州在之名望国家之光輝也、苟君德明、於上民風振、於下則富彊之勢勃焉、業芸之道蔚焉、達時務者觀之而、興起可以伸其驥足也矣、此青山氏有日本博覧図之撰、網羅素封鉅室通邑望族、自其居館園池至場圃林野攝影写真、於是祠廟勝地、亦在眼底山川形成可以指点也、每県逐次成之写書、所謂名望光輝之現況、足不出戸庭而、富庶万象燦爛森列、于几席之間、試評具眼者一囑之、即不啻油然興發愛国之懷、又将企図国家前途之隆盛益熾矣、而視有用資于王之賢豪、亦迭起於斯図中也、必矣、豈知偉観哉 明治廿五年十二月 聴雨窓主人 角田真平選并書」

「観光」の語源となった『易経』の「観国之光利用資于王(国の光を観る、もつて王の資たるに用いるによるし)」の言葉を引いて、『博覧図』製作の意義を述べている。

次に、貴族院議員で書家の金井之恭<sup>(47)</sup>の序が続く。

「明治以降。官令府県。勸奨民業。今既廿余年。田園大闢。工芸日精。貨財錢帛之用。充溢豐贍。自通邑大都。至辺境僻陬。無泣餓訴寒之戸。蓋所盛矣。精行舎主人。乃図各地農工商家宅庭園。及官衙学校病院。会社銀行。祠仏宇。温泉場。製造廠等。又記其所従業務。所製造販鬻物品名目。鮮明鏤刻。將以公于世。余当扈 聖駕。巡游諸道。所到憩宿。卒係図中之家。今茲所開。貴族衆議両院議員。亦多出于此者。余覽此図。既追想疇昔。又喜其有勸誘後進之功也。

明治廿五年十二月 従四位 金井之恭識」

明治以降、殖産興業政策により、地方が豊かになつた様子や、『博覧図』の対象となつている家から多くの貴族院議員・衆議院議員が選出されていることなどが述べられている。この序は、年月日は変えてあるが、明治二十三年(一八九〇)十一月刊行の『大日本博覧図 栃木県之部』と同じである。

次に編者である精行社の青山豊太郎が自叙を述べる。

「自叙、往時我国ノ文化未タ開ケズ、四圍関門ヲ鎖シ、各国ノ交際ヲ謝絶シ、眼ニ欧米ノ文明ヲ観ズ、耳ニ泰西ノ學術ヲ聞カズ、我国ノ外ニ天地アルヲ知ラザリシ時ニ当リテハ、人民ノ知識見聞自ラ狭ク、内地ノ交通スラ不充分ニシテ、国ヲ同フシ、郡ヲ等フスルノ人モ、若シ其奉スル所ノ主君ヲ異ニスル等ノ事情アレハ、更ニ交通往来セズ、啻ニ交通往来セザルノミナラズ、彼此相反目シ、呉越モ啻ナラサルノ観アリタリ、今ヤ然ラス、外欧米各国ト交ヲ結び、内文明ノ開拓ニ鋭進スルノ時ニ当リ、汽車汽船郵便電信等文明ノ利器充分備リ、通信往来

ノ便ヲ助ケ、百工技芸商賈ハ蒸々トシテ日上スル秋ニ際シタレハ、農工商ニ従事スル人モ亦、勉テ旧習ヲ脱シ、文明ノ域ニ歩ヲ進メ、人ヲ知り己ヲ知ラル、ハ目下ノ急務ニシテ、当局者ニ取リテ大ナル利益ナラン、編者茲ニ感アリテ日本博覧図ト題シ、日本全国各地方ニ於テ有名ナル農工商ノ家宅・店頭・庭園ハ申スニ及バズ、官衙、学校、病院、会社、銀行、神社、仏閣、名所、古跡、温泉地、製造場等ヲ取り集メ、之ヲ銅版ニ摸写鏤刻シテ製本發賣スルコトヲ企タルニ、幸ニ江湖諸君ノ賛成ヲ得、今回東京府下ヲ始メ、他数県ノ部ヲ出版スルコトトナレリ、夫レ此ノ製本ニ加入シタル人々ハ、各自適意ノ場所ヲ各自ガ意ノ如ク摸写鏤刻シテ、広ク社会ニ公ニシ、永ク保存スルモノナレハ、苟モ、当代文明ノ新日本ニ立テ百般ノ事業ヲ行ヒ、己レノ營業ヲ世人ニ示サント欲シ、或ハ己レガ刻苦經營シタル事蹟ヲ後世ニ伝ヘント欲セラル、士ニハ、実ニ欠クベカラザル道具ニシテ、又タ此ノ製本ヲ購求閱覽スルノ人ハ、座ナカラニシテ各地農工商ノ有様ヲ知り、博ク名境勝地ヲ覽ルコトヲ得ルノ便利アラン、今ヤ此ノ冊子ヲ發兌スルニ臨ミ、聊カ蕪言ヲ叙スルト云爾

明治廿五年十二月下浣

編者 青山豊太郎誌

この自叙も、年月日だけを変えてあるが、内容は明治二十三年（一八九〇）十一月に刊行した『大日本博覧図 栃木県之部』と同じであり、青山が、『博覧図』を刊行し始めた時の意気込みが感じられる。

そして、この明治二十五年（一八九二）十二月に刊行された『大日本博覧図』が画集の第七編であることは、本文の途中に挿入されている社告で分かる。

「社告、弊社出版ノ日本博覧図ハ襄ニ東京横浜其他数県ノ冊子ヲ發行

致シ、大ヒニ江湖ニ信用ヲ博シ、到ル処賛成諸君ノ締約ヲ得、弥々今般第七編ヲ發行スルノ榮ヲ得タリ、猶引続キ第八編ヲ出版可仕候間、有志ノ諸君陸続賛成締約御申込アランコトヲ希望ス

日本博覧図發行・銅石活版彫刻印刷所 精行社

廣告はその後にも三ヶ所に入っている。

「謹告、一、銅石木版彫刻及ビ印刷、一、活版印刷并ニ製本装訂

課目 株券 手形 切符 印紙 商標 名刺 廣告等ノ類

弊社儀起業以來、幸ニ江湖諸君ノ御愛顧を蒙リ、陸続御注文ヲ受ケ、漸次繁榮ニ趣キ候段、難有奉感謝候、就而ハ今回一層勉勵致シ、卓技巧ニ妙ノ職工ヲ増備シ、要スルニ美麗鮮明ヲ主トシ、価モ低廉ヲ旨トシ、且迅速ヲ專一二、毫モ御使用ノ時期ヲ欠サル様、勉メテ需用諸君ノ御便利ヲ計リ、府下及ビ諸県ノ御得意ヘハ引続キ無間断相伺候間、多少ニ不拘御用向被仰付度、伏テ奉願上候

日本博覧図發行所 精行社敬白

「稟告、油画 絹画 コンテ一画 水彩画

今般良工を聘し、低廉の価を以て江湖の需めに応ず、其精其功なる

こと亦我社の専有なり、続々御依頼あらんこと伏而希望す

日本博覧図出版・銅石活版彫刻印刷所 精行社敬白

「稟告、一、地図 家屋図、一、名所 古跡、真景

右御依頼ニ応シ、遠近ニ拘ハラズ画工ヲ派出致サセ、実地摸写製版仕

候間、江湖ノ各位陸続御申込アランコトヲ乞フ

日本博覧図發行所・銅石版彫刻印刷所 精行舎敬白

これらの広告からは、精行社が、明治二十五年（一八九二）段階で、銅版・石版・木版の彫刻と印刷、活版印刷、製本、装訂など幅広い技

画工	画工署名	写生年月日	彫師	彫師署名	発行者	発行年	所蔵	掲載資料
					[深溝池銅版所]			[横濱銅版所] (有隣堂)
					石原徳太郎	明治22年4月	*国会近代デジタルライブラリー	
					石原徳太郎	~	*国会近代デジタルライブラリー	
					石原徳太郎	~	*国会近代デジタルライブラリー	
秋谷梅之助	榎月(縮図)	明治22年12月1日写	村上郡義	榎山(銅)	精行舎	明治25年12月	*国会図書館内デジタル	加須市史資料編2 近現代(八潮市史研究 第4号)
酒井露白	酒井露白(縮図)		村上郡義	村上横山(銅)	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	加須市史 別編人物誌(八潮市史研究 第4号)
酒井露白	酒井露白(縮図)		木村晴山	晴山(銅)	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	加須市史 別編人物誌
秋谷梅之助	榎月(画)		辰野	辰野(銅)	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	
秋谷梅之助	榎月(縮図)		村上郡義	榎山(銅)	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	加須市史 別編人物誌
秋谷梅之助	榎月(縮図)		村上郡義	榎山(銅)	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	
秋谷梅之助	榎月(画)				精行舎	~	*国会図書館内デジタル	
秋谷梅之助	榎月(縮図)		村上郡義	榎山(銅)	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	
[秋谷梅之助]			木村晴山	木村(銅)	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	
秋谷梅之助	調静園主人(画)		山崎芳翠	山崎(刀)	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	
秋谷梅之助	秋谷梅月(縮図)		村上郡義	Murakami	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	
秋谷梅之助	秋谷梅月(縮図)		村上郡義	MURAKAMI	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	
秋谷梅之助	秋谷(縮図)		山崎芳翠	山崎(銅)	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	
秋谷梅之助	秋谷(縮図)	明治23年1月21日写	木村晴山	晴山(銅)	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	
酒井露白	酒井(縮図)		山崎芳翠	山崎(銅)	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	
酒井露白	露白(縮図)		村上郡義	榎山(銅)	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	加須市史 別編人物誌
酒井露白	露白(縮図)		村上郡義	榎山(銅)	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	加須市史 別編人物誌
酒井露白	露白(画)		木村晴山	木村晴山(銅)	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	加須市史 別編人物誌
酒井露白	酒井露白(縮図)		辰野	辰野(銅)	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	加須市史 別編人物誌
酒井露白	酒井露白(縮図)		村上郡義	榎山(銅)	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	加須市史 別編人物誌
酒井露白	酒井露白(縮図)		木村晴山	晴山(銅)	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	加須市史 別編人物誌
酒井露白	酒井露白(縮図)		村上郡義	村上横山(銅)	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	加須市史 別編人物誌
酒井露白	酒井(縮図)		山崎芳翠	山崎(銅)	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	加須市史 別編人物誌
酒井露白	酒井(縮図)		山崎芳翠	山崎(銅)	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	加須市史 別編人物誌
秋谷梅之助	榎月(画)		龍躍	龍躍(銅)	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	
酒井露白	酒井露白(縮図)		木村晴山	晴山(彫刻)	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	加須市史 別編人物誌
酒井露白	酒井露白(縮図)		木村晴山	晴山(銅)	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	加須市史 別編人物誌
酒井露白	酒井露白		山崎芳翠	山崎(銅)	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	加須市史 別編人物誌
酒井露白	酒井露白(画)		辰野	辰野(銅)	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	加須市史 別編人物誌
秋谷梅之助	調静園主人(画)		龍躍	龍躍(銅)	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	
秋谷梅之助	秋谷梅月(縮図)		村上郡義	村上横山(銅)	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	
霜島晴	霜島巴渡(縮図)		山崎芳翠	山崎(刀)	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	
霜島晴	霜島(縮図)		山崎芳翠	山崎(刀)	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	
霜島晴	霜島巴渡(写)		山崎芳翠	山崎(銅)	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	
秋谷梅之助	榎月(縮図)		木村晴山	晴山(彫刻)	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	
霜島晴	霜島巴渡(写)		山崎芳翠	山崎(銅)	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	『幸手市史 川と道』
霜島晴	東清舎霜島巴渡(写)		村上郡義	村上横山(銅)	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	『八潮市史研究 第4号』
霜島晴	巴渡(縮図)		村上郡義	榎山(銅)	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	
霜島晴	霜島巴渡(縮図)		太田翠崎	太田翠崎(銅)	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	
霜島晴	霜島巴渡(写)		村上郡義	村上横山(銅)	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	
霜島晴	東清舎霜島巴渡(写生縮図)		村上郡義	村上横山(銅)	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	岸田氏収集 7307・*~
霜島晴	霜島巴渡(写)		村上郡義	村上横山(銅)	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	
上方	上方(縮図)		山崎芳翠	山崎(銅)	精行舎	~	*国会図書館内デジタル	
石田孝友	白龍軒呼友(写)印(石田)	明治26年2月下旬	北野直	N. K	精行社	明治27年12月	*神奈川県立公文書館寄託家文書	『八潮市史研究 第4号』のみならず三郷市史研究 第5号
石田孝友	白龍軒呼友(写)印(石田)	明治26年2月27日	山崎芳翠	山崎(刀)	精行社	~	*神奈川県立公文書館寄託家文書	『八潮市史研究 第4号』
石田孝友	白龍軒呼友(写)印(石田)	明治26年春月	伊東良之助	伊東良(銅)	精行社	~	*神奈川県立公文書館寄託家文書	『八潮市史研究 第4号』
石田孝友	白龍軒呼友(写)	明治26年	山崎芳翠	山崎(銅)	精行社	~	*神奈川県立公文書館寄託家文書	『八潮市史研究 第4号』
石田孝友	白龍軒呼友(写)	明治26年2月7日	北野直	北野(刀)	精行社	~	*神奈川県立公文書館寄託家文書	『八潮市史研究 第4号』
石田孝友	白龍軒呼友(写)	明治26年春	伊東良之助	伊東良(刀)	精行社	~	*神奈川県立公文書館寄託家文書	『吉川市史 資料編近代』(八潮市史研究 第4号)
石田孝友	白龍軒呼友(写)	[明治26年]	山崎芳翠	山崎(刀)	精行社	~	*神奈川県立公文書館寄託家文書	『吉川市史 資料編近代』(八潮市史研究 第4号)
石田孝友	白龍軒呼友(写)	明治26年2月5日	伊東良之助	伊東良(銅)	精行社	~	*神奈川県立公文書館寄託家文書	『八潮市史研究 第4号』
石田孝友	白龍軒呼友(写)	明治26年初夏	精行舎		精行社	~	*神奈川県立公文書館寄託家文書	『吉川市史 資料編近代』(八潮市史研究 第4号)
石田孝友	白龍軒呼友(写)	明治26年春月	山崎芳翠	山崎(刀)	精行社	~	*神奈川県立公文書館寄託家文書	『吉川市史 資料編近代』(八潮市史研究 第4号)
石田孝友	白龍軒呼友(写)	明治26年初夏	精行舎		精行社	~	*神奈川県立公文書館寄託家文書	加に記されて八潮の歴史アルバム(八潮市史研究 第4号)
[石田孝友]	[白龍軒呼友(写)]	[明治26年]			精行社	~	*神奈川県立公文書館寄託家文書	加に記されて八潮の歴史アルバム(八潮市史研究 第4号)
石田孝友	白龍軒呼友(写)	明治26年夏月			精行社	~	*神奈川県立公文書館寄託家文書	加に記されて八潮の歴史アルバム(八潮市史研究 第4号)
霜島晴	東清舎霜島巴渡(写)		村上郡義	村上横山(銅)	精行舎	~	*神奈川県立公文書館寄託家文書	『八潮市史研究 第4号』
秋谷梅之助	榎月(縮図)	明治22年12月1日写	村上郡義	榎山(銅)	精行舎	~	*神奈川県立公文書館寄託家文書	加須市史 別編人物誌(八潮市史研究 第4号)
石田孝友	白龍軒呼友石田(写)	明治27年5月上旬	村上郡義	象童(銅)	精行舎	~	行政文書 明2376-1・*~	『八潮市史研究 第4号』
石田孝友	白龍軒呼友石田(写)	明治26年冬月	村上郡義	村上(銅)	精行社	~	*神奈川県立公文書館寄託家文書	『八潮市史研究 第4号』
酒井露白	酒井露白(縮図)		村上郡義	村上横山(銅)	精行舎	~	*神奈川県立公文書館寄託家文書	加須市史 別編人物誌(八潮市史研究 第4号)
霜島晴	東清舎霜島巴渡(写生縮図)		村上郡義	村上横山(銅)	精行舎	~	*神奈川県立公文書館寄託家文書	岸田氏収集 7307・*~
霜島晴	東清舎霜島巴渡(写生縮図)	明治21年4月	石井義雄	蓮々堂門人石井義男(銅)	精工組	明治21年4月	田中家 1350	
					精行舎	明治23年9月	原史 C H 373-69	
渡辺広方	渡辺広方(画)		山崎芳翠	山崎芳翠(銅)	精行社	明治28年	行政文書 明2394-29	
渡辺広方	渡辺広方(写)		皆川卓彦	皆川卓彦(彫刻)	精行社	明治29年	*天理参考館	
石田孝友	白龍軒呼友石田(写)		兼松正義	聊勝(銅)	精行社	明治30年頃	行政文書 明2414-10	
渡辺広方	広方(写)		皆川卓彦	皆川卓彦(銅)	附生龍之丞製陶	[明治30年以降]	小宅家 5624	
興宗保屋・石田孝友	興宗保屋(写)・石田呼友(写)		兼松正義	兼松正義(銅)	精行社	明治33年3月	西内井家 8186	
石田孝友・渡辺広方	石田呼友(写)・渡辺広方(縮図)				精行社銅版部		鈴木(備)家 9352	
渡辺広方	ひろ方(画)		石井義雄	義雄(銅)	精行社		*川越市立博物館	『図録 古市場河岸植木家の民具』
霜島晴	東清舎霜島巴渡(写)				精行社	明治38年7月	*秩父宮記念三崎山博物館	
石田孝友	石田白龍(画)		小林桃山	小林桃山(銅)	精行社	大正4年8月	*埼玉立准同國函館 S188七	

表四 埼玉を描いた『博覧図』一覧表 (付. 精行社一枚物)

①横浜諸会社諸商店之図 ②大日本博覧図(明治22年4月刊行) ③大日本博覧図(第7編)(明治25年12月刊行)  
④日本博覧図 第拾編(明治27年12月刊行) ⑤精行社一枚物

No.	番名	頁	目次所在地	現市町村	目次名前	種類	図版題名
1	①(横浜諸会社諸商店之図)	[11]		神田町	原太平	絹商店舗	武蔵国児玉郡渡瀬 龟屋 原太平
2	②大日本博覧図	50		久喜市	渡邊義章	邸宅	埼玉県北葛飾郡八甫村ニッ谷 渡邊義章
3	〃	51		加須市	清水善兵衛	青磁陶器	本場青磁買次郎屋 埼玉県武州北埼玉郡加須町七拾六番地 清水善兵衛
4	〃	[52]		加須市	大和門次	菓園	かぞのかんのくすり 埼玉県武州北埼玉郡加須町四十三番地 大和門次
5	③大日本博覧図(7編)	30	北埼玉郡不動岡村	加須市	埼玉英和學校	學校	私立埼玉英和學校 埼玉県北埼玉郡不動岡村
6	〃	31	全所	加須市	総願寺	寺院	埼玉県北埼玉郡不動岡村大字不動岡 玉崎山総願寺
7	〃	32	全所字下谷	加須市	矢島太郎衛門	農家	埼玉県北埼玉郡不動岡村大字下谷 矢島太郎右エ門
8	〃	33	全部川俣村	羽生市	福越本家	農家・醸造	埼玉県北埼玉郡川俣村 福越本家
9	〃	34	全志多村大字中作	加須市	酒巻敬之助	農家	埼玉県北埼玉郡志多村大字中作 酒巻敬之助
10	〃	35	全星河村大字齊藤	行田市	松岡平六	農家	埼玉県北埼玉郡星河村大字齊藤 松岡平六
11	〃	36	全所和田	行田市	竹内豊作	農家	埼玉県武蔵国北埼玉郡星野村大字和田 竹内豊作
12	〃	37	全部長野村	行田市	横田庄右衛門	醸造	埼玉県武蔵国北埼玉郡長野村 清酒醸造 日野屋 横田庄右衛門
13	〃	38	全部忍町大字行田	行田市	鈴木忠右衛門	醸造	埼玉県武蔵国北埼玉郡忍町大字行田 清酒醸造 日野屋 鈴木忠右衛門
14	〃	39	全部持田町大字持田	行田市	三田幸司	農家	埼玉県北埼玉郡持田町大字持田 三田幸司
15	〃	40	全所	行田市	岡田 求	農家	埼玉県北埼玉郡持田町大字持田 岡田求
16	〃	41	全所	行田市	小宮喜一	農家	埼玉県北埼玉郡持田町大字持田 小宮喜一
17	〃	42	全村行田下忍	行田市	八木麟惣五郎	呉服店	呉服店 埼玉県北埼玉郡持田町行田下忍 山本屋 八木麟惣五郎
18	〃	43	全部大井川開田	熊谷市	保住源輔	農家	埼玉県北埼玉郡大井川開田 保住源輔
19	〃	44	全委倉村大字委倉	加須市	小室清之助	農家・醸造	埼玉県北埼玉郡委倉村大字委倉 小室清之助
20	〃	45	全大越村大字大越	加須市	野中平輔	農家	埼玉県北埼玉郡大越村大字大越 野中平輔
21	〃	46	全所	加須市	榎本勘之進	農家	埼玉県北埼玉郡大越村大字大越 榎本勘之進
22	〃	47	全所	加須市	徳性寺	寺院	埼玉県北埼玉郡大越村大字大越 徳性寺
23	〃	48	全所	加須市	腰塚慶藏	農家	埼玉県北埼玉郡大越村大字大越 腰塚慶藏
24	〃	49	全大森村大字南峰崎	加須市	大越栄一郎	農家・醸造	埼玉県北埼玉郡大森村大字南峰崎 大越栄一郎
25	〃	50	全大字南大森	加須市	門井總之丞	農家	埼玉県北埼玉郡大森村大字南大森 門井總之丞
26	〃	51	全三俣村大字多門寺	加須市	網野豊次郎	農家	埼玉県北埼玉郡三俣村大字多門寺 網野豊次郎
27	〃	52	全村大字下三俣	加須市	梅沢與吉	染物	埼玉県北埼玉郡三俣村大字下三俣紅池 梅沢與吉
28	〃	53	全加須町大字久下	加須市	野本茂右衛門	農家・醸造	埼玉県北埼玉郡加須町大字久下 野本茂右衛門
29	〃	54	全部羽生町	羽生市	峰 惣兵衛	醸造	醤油醸造 埼玉県北埼玉郡羽生町 松屋 峰惣兵衛
30	〃	55	全大森村大字大花崎	加須市	川島倉藏	農家	埼玉県北埼玉郡大森村大字大花崎 川島倉藏
31	〃	56	全所	加須市	中山理作	農家	埼玉県北埼玉郡大森村大字大花崎 中山理作
32	〃	57	北埼玉郡水深村大字大室	加須市	新井鬼司	農家	埼玉県北埼玉郡水深村大字大室 新井鬼司
33	〃	58	全所	加須市	新井門之助	農家	埼玉県北埼玉郡水深村大字大室 新井門之助
34	〃	59	全駒西町	加須市	小森久左衛門	醸造	埼玉県北埼玉郡駒西町 清酒醤油味噌醸造 釜原 小森久左衛門
35	〃	60	全大字駒西	加須市	斎藤庄三郎	農家	埼玉県北埼玉郡駒西町大字駒西 斎藤庄三郎
36	〃	61	南埼玉郡鷲宮村大字上内	久喜市	高橋莊之丞	農家	埼玉県南埼玉郡鷲宮村大字上内ニッ谷 高橋莊之丞
37	〃	62	全所鷲宮	久喜市	白石八左衛門	農家	埼玉県南埼玉郡鷲宮村大字鷲宮下新井 白石八左衛門
38	〃	63	南埼玉郡津村大字高岩	白岡市	新井啓一郎	農家・醸造	埼玉県南埼玉郡津村大字高岩 新井啓一郎
39	〃	64	全部百間村大字百間中	宮代町	島村 繁	農家	埼玉県南埼玉郡百間村大字百間中 島村繁
40	〃	65	全久喜町大字久喜新	久喜市	鈴木仙右衛門	醸造	清酒醸造 埼玉県南埼玉郡久喜町大字久喜新 日野屋 鈴木仙右衛門
41	〃	66	北葛飾郡幸手町	幸手市	岸本浪太郎	醸造	埼玉県北葛飾郡幸手町 醤油醸造 上野屋 岸本浪太郎
42	〃	67-68	全所	幸手市	牛村病院	病院	埼玉県幸手町 牛村病院
43	〃	69	全板田村大字上川崎	久喜市	渡邊宗三郎	農家	埼玉県北葛飾郡板田村大字上川崎 渡邊宗三郎
44	〃	70	全所	幸手市	奈良治郎兵衛	農家	埼玉県北葛飾郡板田村大字上川崎 奈良治郎兵衛
45	〃	71	北葛飾郡八代村	幸手市	新井範次郎	醸造	埼玉県北葛飾郡八代村大字八代須賀 新井範次郎
46	〃	72	全高野村大字英島	杉戸町	野口 斐	農家	埼玉県北葛飾郡高野村大字英島 野口斐
47	〃	73	全上高野村	幸手市	竹内増兵衛	醸造	埼玉県北葛飾郡上高野村 清酒醸造 竹内増兵衛
48	〃	74	全豊野村大字榊塚	春日部市	越沼治兵衛	醸造	埼玉県北葛飾郡豊野村大字榊塚 越沼治兵衛
49	④日本博覧図 第拾編	111	北葛飾郡八木郷村	三郷市	八木郷小学校	學校	埼玉県北葛飾郡八木郷村 八木郷尋常小学校
50	〃	112	全 早稲田村	三郷市	中村亀之助	農家	埼玉県北葛飾郡早稲田村字田 中村亀之助
51	〃	113	全	三郷市	富山伊右衛門	農家	埼玉県北葛飾郡早稲田村字田 富山伊右衛門
52	〃	114	全	三郷市	齋藤有三郎	農家	埼玉県北葛飾郡早稲田村丹後 齋藤有三郎
53	〃	115	全	三郷市	石井政康	農家	埼玉県北葛飾郡早稲田村谷中 石井政康邸宅
54	〃	116	全 三輪野江村	吉川市	石井豊之丞	農家	埼玉県北葛飾郡三輪野江村字中 石井豊之丞邸宅(石井政康分家)
55	〃	117	全 吉川村	吉川市	高麗新八	醸造	埼玉県北葛飾郡吉川村平沼 高麗新八邸宅
56	〃	118	全	吉川市	高麗廻蘭	庭園	其二 高麗廻蘭之園
57	〃	119	全 旭村	吉川市	邵文小学校	學校	埼玉県北葛飾郡旭村 邵文小学校之園
58	〃	120	全 吉川村	吉川市	田中長藏	醸造	埼玉県北葛飾郡吉川村平沼 田中長藏邸宅
59	〃	121	南埼玉郡瀧止村	八潮市	佐藤乾右衛門	農家	埼玉県南埼玉郡瀧止村 佐藤乾右衛門宅之園
60	〃	122	全所	八潮市	田中三郎左衛門	農家	埼玉県南埼玉郡瀧止村二丁目 田中三郎左衛門邸宅
61	〃	123	全 八條村	八潮市	会田惣治郎	農家	埼玉県南埼玉郡八條村大字八條 会田惣治郎
62	〃(③67・68と重複)	124・125	幸手町	幸手市	牛村病院	病院	埼玉県幸手町 牛村病院
63	〃(③30と重複)	126	北埼玉郡不動岡村	加須市	埼玉英和學校	學校	私立埼玉英和學校 埼玉県北埼玉郡不動岡村
64	〃	127	賀美郡神保原村	上里町	池上神社	神社	埼玉県賀美郡神保原村 延喜式内今城青坂福来池上神社
65	〃	128	全 賀美村	上里町	陽雲院	寺院	埼玉県賀美郡賀美村大字金久保 陽雲院之真景
66	〃(③31と重複)	129	北埼玉郡不動岡村	加須市	総願寺	寺院	埼玉県北埼玉郡不動岡村大字不動岡 玉崎山総願寺
67	〃(③72と重複)	130	北葛飾郡高野村	杉戸町	野口 斐	農家	埼玉県北葛飾郡高野村大字英島 野口斐
68	⑤精行社一枚物			秩父市	三峰神社	神社	武蔵国秩父郡三峰神社全区
69	〃			久喜市	鷲宮神社	神社	埼玉県南埼玉郡鷲宮之宮村鎮座 鷲宮神社境内之園
70	〃			川越市	仙波喜多院	寺院	武州川越仙波喜多院
71	〃			東松山市	箭弓稲荷神社	神社	埼玉県武州松山 箭弓神社境内内園
72	〃(①128の修正改刻)			上里町	陽雲寺	寺院	埼玉県賀美郡賀美村大字金久保 陽雲寺之真景(再刻)
73	〃			日高市	高麗山聖天院	寺院	埼玉県人間郡高麗村 高麗山聖天院境内内園
74	〃			さいたま市	水川神社(石版瀨)	神社	武蔵国宮城郡水川神社行幸之園
75	〃			川島町	広徳寺	寺院	埼玉県北葛飾郡三俣村 大御山広徳寺全区
76	〃			川越市	橋本三九郎	醸造・問屋	人間郡南古谷村大字古市市場 橋本三九郎之邸宅
77	〃			秩父市	三峰神社	神社	武蔵国秩父郡三峰神社全区
78	〃			川越市	仙波喜多院	寺院	武州川越仙波喜多院

明治期風景銅版画をめぐって(芳賀)

術を持ち、扱う商品も、『博覧図』の外、株券・手形・切符・印紙・商標・名刺・広告など多岐に亘っていること、優秀な職人を擁し、油画・絹画・コンテ画・水彩画などにも応じられる質の高さを持っていたことが分かる。また、地図・家屋図、名所・古跡真景の作製依頼には、遠隔地にも画工を派出させると述べている。また、対象とする範囲が、全国に広がっていたことも窺われる。奥付は以下の通である。

「明治廿五年十二月 日印刷 全年全月 日出版 正価金参円

編集者 愛知県平民 青山豊太郎

東京市浅草茅町二丁目三番地寄留

発行兼印刷者 東京府平民 秋谷樫之助

東京市神田区富松町二番地

発行所 精行社 東京市浅草区茅町三丁目三番地

この後に示された『博覧図』の売捌所は三十八ヶ所で、各県に亘っており、埼玉県唯一の売捌所は、鴻巣の長嶋為一郎の書店である<sup>48)</sup>。

この『大日本博覧図』〔第七編〕には、醸造業を営む茨城県西豊田村中山忠造氏の邸宅と庭園の二枚続きの『博覧図』が掲載されている。八千代町歴史民俗資料館に、「精行舎草」の印が三ヶ所つづつ押印してある中山忠造氏宛の代金受取証二枚（中山忠造家 4299-11）が寄託されているので、参考に紹介したい。名前は「忠造」ではなく、「忠蔵」と記されている。

一 証

家宅図式枚続キ 画工費及銅版彫刻料

一、金式拾円也

右正二受取申候也

明治廿三年十月十三日 東京神田区柳原川岸廿号地 精行舎

中山忠蔵殿

一 証

中等葉刷式百枚代

一、金壹円四十銭

右正二受取申候也

明治廿三年十月十三日 東京神田区柳原川岸廿号地 精行舎

中山忠蔵殿

版画の原版製作の代金は一枚十円、印刷した中等の版画は百枚単位で七十銭であることが分かる。明治二十三年（一八九〇）十月に銅版が仕上がっており、精行社はまだ精行舎（東京市神田区柳原川岸煉瓦二十号地）の時代であった。作品は二百頁ほどで版画集とするため、版画完成の二年後に版画集に納められたのである。版画が製作されるから、版画集になるまでは、かなり時間がかかったことが分かる。版画集の刊行後、版画集一冊と版画の原版は注文者に納められた。なお、中山忠造は『大日本博覧図』（明治二十二年（一八八九）刊行）にも図版を載せており、寄託資料の中には、『大日本博覧図』も残っている。この『大日本博覧図』〔第七編〕には、埼玉県内を描いた銅版画が四十四点ある。地域は北埼玉郡・南埼玉郡・北葛飾郡に限られている。内、十七点は『加須市史 別編 人物誌』に、四点は『八潮市史研究 第4号』に、一点が『幸手歴史物語 川と道』に掲載されている（表四参照）。

商標を添えたり、庭に樽を置いた醸造所が十四ヶ所、寺院が二ヶ所（総願寺、徳性寺）、学校（市立埼玉英和学校）と病院（牛村病院）

が一ヶ所つづつある。他は農家であるが、これらの農家は元名主階層が多く、長屋門を構え、防風林が囲む広大な屋敷には、母屋、作業小屋、土蔵などが建ち並び、燈籠や池がある庭園も設けられている。家族や働く人々も描き入れられており、当時の豪農の生活風景が甦る。例として、巻末に載せた『埼玉県北葛飾郡高野村大字茨島野口藪』を御覧いただきたい。当主である県会議員野口藪の漢詩と父親雪蓑の俳句を添え、霜鳥晴が描いて村上都義が刻した、正確でありながら詩情豊かな邸宅図である(巻末図参照)。

画家は酒井露白が十六点、これは全て北埼玉郡である。秋谷梅之助(秋谷椽月)の作品は十五点(内二点は調静園主人と表記)あり、場所は北埼玉郡だが、一点だけ南埼玉郡の久喜が入っている。精行社の画工の屋台骨ともいえる霜鳥晴(霜鳥巴凌)は、北葛飾郡、北埼玉郡・南埼玉郡の十一点を担当している。他に、土方力が一点北葛飾郡を描いている。

また、北埼玉郡に画工名がない作品が一点あるが、前後が秋谷の画であることから、秋谷の作品の可能性が高い。写生年月は、秋谷の二点に明治二十二年(一八八九)十二月一日、二十三年(二八九〇)一月廿一日とあるため、秋谷が明治二十二年(一八八九)の冬から二十三年(一八九〇)にかけて北埼玉郡を写生したことが分かる。しかし、それ以外は月日がなく、他の画家の作成時期は辿ることができないが、各々の画家も担当した地域を回りながら写生をしていたのであろう。彫師は村上都義(村上椽山)が十七点、山崎芳翠が十二点、木村晴山が八点、辰野が三点、龍躍、龍蹊が一点づつを手掛けている。彫師は特定の画工と組むのではなく、何人もの画工の画を彫刻している。

(四)『日本博覧図 第拾編』(明治二十七年十二月刊行)

題字「流芳万古 如楓散人圭介」は、外交官大島圭介<sup>(4)</sup>の手になるものである。次に七編と同様に、貴族院議員で書家の金井之恭の序があるが、文章は新たに書き起こされている。

「維新以降、政府奨励農商業、庶民鬻風大興、家道者更僕難數、自居室之造構、器具之制作、以至養蚕製茶之法、釀酒造漿之術、日新月精競効其巧而、依其地異其法、各有長短、未聞有集大成之者也。精行舎主曾有見于、此製日本博覧図、就三府四十三県中而、選農商巨擘図、其平生營業之状、附以園圃林泉之勝、詳細無遺被覽之際、恍覺身在其境矣、此図漸次印行、遍及全国、善觀者参伍折衷攻究研精、以得均一之良法則、国家富源之開、未必有不由於此也。予曾題初編、今又書所見於卷首還之。 正四位 金井之恭識(落款)」

「予曾題初編」とあるのは、『大日本博覧図 栃木県之部』(明治二十三年刊行)に付けた序を指すと思われる。続いて青山の自叙がある。

「自叙、我邦一たび開国の主義を執りしより、壺中の仙境変して東洋文明の新天地となり、庶物百般悉く其面目を新にせり。爾來星霜を経ること実に二十余、明治第二十七年に至りて、更に第二維新の時機到り、開国進取の主義は其膨張する所愈広且大となれり。そは、彼の日英条約の改正及日清交戦の事等に於て、我が文明進捗の実力は、大に欧米各国の知るところとなり、我が日本の地位ハ俄然として更に幾層を高めたるに因る。吾人また益進て、我日本の将来を思ひ、奮てこれに應ずるの策を講し、日本の地位とともに、吾が一個人の地位をも進ましめざるべからず。我国人たるものは、各自執る処の事業ニよりて、既に其覚悟あらんことハ、吾人の深く信して疑はざる処なり。而して

其これに應ずるの方法は多端なりと雖も、彼の条約改正の結果として、外人の我邦に来るもの弥増加するに至らば、これによりて我か国家の利益もまた、相伴ひて増進するを得べく、此時に当りて第一これに処すべきものは、己を知らしむるに在り。即ち我邦固有の美術に就ては、神社・仏閣・楼屋・殿舎・泉池・庭園の結構、農工商に就てハ養蚕・種芸・紡績・機織・醸酒・製塩・銀行・商社等の位置・構造、其他、衛生・教育に関する諸学校・病院の如きに至るまで、種々の方法によりてこれを外人に知悉せしむるを要するなり。吾が日本博覧図ハもこの目的を以て発行し、既に第九回を出版せり。今や国歩進捗の時に際し、益其統篇発行の必要あるに当り、編者の企望の遂に空しからざりしを歎ひ、第十編成るに及びて、いさゝか蕪言を叙すること爾り。

明治二十七年十二月

編者 青山豊太郎(落款)

明治二十七年(一八九四)七月十六日に結ばれた日英通商航海条約は、明治政府の悲願であつた条約改正における最初の改正条約であつた。陸奥宗光の尽力により締結されたこの条約により、領事裁判権と治外法権の撤廃と引き換えに、外国人の内地雑居が認められることとなつた。その直後の八月一日に日清両国が宣戦布告し、日清戦争が始まつた。青山の自叙は、これを受けて書かれたものであり、「彼の条約改正の結果として、外人の我邦に来るもの弥増加するに至らば、これによりて我か国家の利益もまた、相伴ひて増進するを得べく、此時に當りて第一これに処すべきものは、己を知らしむるに在り。」と『博覧図』の企図する所を述べている。

また、この拾編には、精行社と書家・画家の関係を示す社告があるので併せて紹介しておきたい。

「社告、弊舎従来日本博覧図ノ出版ヲ以テ大ニ江湖ノ賞賛ヲ得、爾来編ヲ重ヌルコト十有余編、而シテ毎編必ス貴顕紳士及ヒ諸大家之題字或ハ序跋ヲ乞ヒ、編上幾層ノ光彩ヲ添ル已而ナラズ、且依之幸ヒ諸大家之知遇ヲ蒙ムレルヲ機緒トナシ、今回本業ノ傍ラ懇切ヲ旨トシ、各貴紳大家書画紹介ノ勞ヲ執リ、普ク諸君ノ高需ニ応セントス、乞フ、希クハ大方ノ諸彦彼ノ贗偽以テ人ヲ欺罔シ、畢タ利是レ貪ル世間普通ノ書画周旋家ト同視セス、陸続御依囑アラソコトヲ、乃チ今本挙ニ賛成セラレタル諸大家ノ貴名ヲ記ス、左ノ如シ

勝海舟先生、金井金洞先生、巖谷一六先生、長三洲先生、日下部鳴鶴先生、瀧和亭先生、橋本雅邦先生、松本楓湖先生、川端玉章先生、川邊御楯先生、荒木寛畝先生、此他諸大家先生

東京市浅草区茅町式丁目三番地

日本博覧図出版・諸大家書画紹介 精行社 敬白

精行社は書画の周旋・斡旋も行つており、右に挙げられた人々を初め、著名な書家や画家達との繋がりが深く、博覧図の題字も依頼していた。右の中で、勝海舟、金井金洞(金井之恭)、長三洲は、『博覧図』に題字や序を書いている。ここにはないが、「玉塚版」の玉塚栄次郎の書道の師である西川春洞も、精行社が揮毫を斡旋する書家であつた。また、前述した『博覧図』の画工折井太一郎(愚齋)は橋本雅邦の弟子であり、精行社の画工の招聘にも、その関係が寄与していたとも考えられる。

奥付は以下のとおりである。

「明治廿七年十二月十日印刷 全年全月十五日出版 正価金参円五十銭

編集者 愛知県平民 青山豊太郎 東京市浅草茅町二丁目三番地寄留  
発行兼印刷者 東京府平民 秋谷樫之助 東京市神田区富松町二番地

発行所 精行社 東京市浅草区茅町三丁目三番地

奥付は第七編と大きな変化はないが、一冊の値段は五十銭上がつている。また、各県売捌書林には若干の変更がある。埼玉県の売捌書店は、そのまま鴻巣の長嶋為一郎の書店である。

この拾編には、埼玉県を描いた十九点の銅版画があるが、牛村病院私立埼玉英和学校、総願寺、野口繁家の四点は、前述の『大日本博覧図』〔第七編〕(明治二十五年(一八九二)刊行)の再掲載である。創立記念に銅版画を作製した八木郷尋常小学校を初め、学校は三校(八木郷尋常小学校・郁文小学校・私立英和学校)である。醸造所は、味醂の商標を添え、庭園図も付けた高鹿家と、商標を添えた田中家の二軒である。他は農家で、広大な屋敷に点景人物が配されている。川沿いの景色もあり、帆船が航行している様子も描かれている。

霜鳥晴(霜鳥巴凌)の二点、酒井露白の一点、秋谷梅之助(秋谷楳月)の一点は前述の『大日本博覧図』〔第七編〕の重複分である。重複していない新規の銅版画は、全て石田孝友(石田呼友)が新たに描いたものである。そのため、新規の作品で画工の名がない一点も石田の作品と推定され、石田は十五点を描いたことになる。写生の月日が記されており、明治二十六年(一八九三)の二月から夏に集中的に写生し、二十六年(一八九三)の冬と二十七年(一八九四)の五月に一点づつを描いたことが分かる。彫師は、村上都義(村上楳山)が六点、山崎芳翠が四点、伊東良之助が三点、北野直が二点を手掛けている。

この『日本博覧図 第拾編』の埼玉分の全図版は、『八潮市史研究 第4号』(八潮市史編さん室 昭和五十七年(一九八二)刊)に掲載されている(表四参照)。

## 五『博覧図』のその後

(一)『国乃誉』(明治三十一年八月刊行)

精行社は、明治三十年代に、『国乃誉』という新シリーズを刊行している。版画の枠外に国々之誉発行処と印刷されており、ローマ字表記がないものもある。明治三十一年(一八九八)に千葉県を対象とした版画集『国乃誉』が刊行されたが、大谷弘幸氏「版画にみる明治の千葉県」(平成二十二年(二〇一〇)三月)に拠れば、全二百十九点中、百八十三点は再録であり、新規の作品は三十六点に過ぎない(表一参照)。

「心能会境 通禮」は東久世通禮の書、「修徳立志 雪津」は佐野常民<sup>(51)</sup>の書である。青山の自叙は、署名が青山青桃と替わっている。

「自叙、本編ハ巨社名刹佳境勝区を図しましやるに、屈指の農商工各種の会社工場及齎舎等を以てし、之を世に公にし、後世に伝ふるを旨意とす、苟も世に伝へ人に紹介するに足るものは、其建築の何たるを問はず、これを实地に臨写鐫刻して冊子となし、名けて国の誉といひ、今其第一編を成せり、蓋農商工会社工場等を載るものハ、其各自か辛苦経営に成れる事蹟を人に示し、祖先を顕彰し、子孫を奮起せし世事の好方便なるのみならず、亦自家の生業を四方に声揚するの便益多く受むはあらず、庶幾は江湖本編の旨趣を賛成するの士君子は、偏者の微衷を大成せしめて、以て福利を共受せむことを

明治三十一年戊戌立秋 編者青山青桃拝識(落款)

奥付からは、京都と横浜に出張所を置いていたことが分かる。

「明治三十一年八月一日印刷

全 年全月十五日出版 正価金三円五拾銭

編輯兼発行者 東京市浅草区茅町二丁目三番地 青山豊太郎

印刷兼発行所 東京市浅草区茅町二丁目三番地 精行社

電話 浪花九百八十六番

発行所 京都市下京区寺町通高辻上ル 精行社京都出張所

発行所 横浜市戸部百十八番地 精行社横浜出張所

前述した『埼玉県人間郡高麗村高麗山聖天院境内全図』(図14)(小室家 五六二四)には「国之誉発行処」の表記があり、筆者は、木曾の御嶽を描いた『国之誉』も管見したことがある。全国の寺社や邸宅で作成されていたはずだが、版画集は千葉県以外には見当たらない。

## (二)『博覧図』の収束

その後、精行社は、寺社などの一枚物の銅版画は製作し続けていくが、『博覧図』や『国乃誉』の版画集の刊行については確認できない。収束の原因としては、前述した東京都公文書館の史料にあるように、明治三十年代に銅版画が衰退していったことに加え、明治三十二年(一八九九)十二月の「辞任届」が、青山豊太郎の精行社からの引退に繋がるのであれば、それが要因ではないかと推測される。

明治二十六年(一八九三)六月に記された『静岡県 後編』の青山の自叙には、「今や第八編印刷効ヲ竣へ、将二世二公にセントス、是又不肖他ノ技量ナク材識乏シクシテ、世ヲ利シ人ヲ益スルノ能ナシ、故ニ畢生ノ力ヲ揮テ此業ニ注グ、聊国家ニ報スルノ微志ナラン乎」とある。毎編の青山の自叙を見ると、『博覧図』の製作と出版が、青山豊太郎の強い意志と使命感により継続している感があり、青山を欠いた精行社では、その製作や出版が維持できなかったのではないだろうか。

愛知県平民という以外、青山の生没年や履歴は不明であるが、明治

三十二年(一八九九)頃に写した写真が残っている。精行社は日本画家橋本雅邦<sup>52)</sup>の画の斡旋をしており、青山は川越の名士達が中心となつて結成した橋本雅邦の後援会「画宝会」<sup>53)</sup>の幹事を務めていた。青山が所蔵する雅邦作品を出品した明治三十二年(一八九九)十一月の展示会(生輝会主催)図録『雅邦翁墨妙集』(画報社 明治三十三年(一九〇〇)刊)と、明治三十三年五月の展示会(画宝会主催)図録『雅邦集第二』(同)の巻末に「画宝会幹事準備員」の集合写真があり、二枚目の東京在住幹事の一人として、後列右端に、羽織袴姿の青山豊太郎が写っている。その後、明治三十五年(一九〇二)十二月の図録『共寿余録』(画報社 明治三十六年(一九〇三)刊)にも出品作品があり、此頃まで画宝会で活動していたことが知れる。

今後、『博覧図』の全容を解明していくためには、青山豊太郎の履歴や人物像の把握が必要であると考ええる。

## 終りに

本稿の執筆にあたり、大谷弘幸氏、小嶋正亮氏、白石克氏、千田晃平氏、中谷哲二氏、藤城城一氏、水谷一彦氏、三橋恒子氏より貴重な御教示を得た。資料の確認については、上田市立博物館、神奈川県立公文書館、久喜市立郷土資料館、秩父宮記念三峯山博物館、浜松市立図書館、平林寺、八千代町歴史民俗資料館、青戸直子氏、賀川隆行氏、樫木昌玄氏、高松敬氏、千島幸明氏、中村崇高氏、原嶋十四男氏、宮原一郎氏にお世話になった。心より感謝申し上げます。(平成二十五年一月十五日 記)

註

- (1)平成二十四年度コーナー展示『銅版画にみる近代日本の風景』(平成二十四年(二〇一二年)九月二十五日〜十二月二十二日)では、当館収蔵銅版画を中心に約八十点を展示した。HPにパンフレット(PDF)が登載されている。
- (2)『八潮市史研究 第4号』八潮市史編さん室 昭和五十七年(一九八二年)刊、『加須市史 資料編Ⅱ 近現代』加須市 昭和五十八年(一九八三年)刊、『加須市史 別編 人物誌』加須市 昭和五十九年(一九八四年)刊、『吉川市史 資料編 近代』吉川市 平成二年(一九九〇)刊、『川に抱かれて 八潮の歴史アルバム』八潮市 平成六年(一九九四)刊、『幸手市史 抱かれて 幸手歴史物語 川と道』幸手市教育委員会 平成十四年(二〇〇二)、『葦のみち 第五号』三郷市 平成十五年(二〇〇三)刊等。
- (3)埼玉を描いた作品が含まれる次の四点の銅版画集は複製版や資料保存機関で閲覧できる。①『横浜諸会社諸商店之図』(出版年不明)は、『横濱銅版画』(神奈川県立博物館編 有隣堂 昭和五十七年(一九八二)刊)に所収、②『大日本博覧絵』(明治二十二年(一八八九)四月刊)は、国立国会図書館の近代デジタルライブラリーでインターネット公開されている。③『大日本博覧図』(第七編)明治二十五年(一九〇〇)十二月刊行)は、国立国会図書館の館内閲覧用デジタル資料で閲覧・複写できる。④『日本博覧図 第拾編』(明治二十七年(一九一四)十二月刊行)は、神奈川県立公文書館の岸家寄託文書にあり、事前申請の上、複製資料の閲覧・複写ができる。
- (4)①『大日本博覧図 栃木県之部』あかぎ出版 昭和六十年(一九八五)刊、②『静岡県明治銅版画風景集』羽衣出版 平成三年(一九九一)刊。③『目でみる千葉県の明治時代』千葉県博覧図』全三冊 国書刊行会 昭和六十一年(一九八六)刊。また、『博覧図』ではないが、同様な銅版画集として、④『明治期銅版画東京博覧図』(『東京商工博覧絵』・『東京名家繁昌図録』・『東京盛開図録』)全三巻 湘南堂書店 昭和六十二年(一九八七)刊 ⑤『横濱銅版画』神奈川県立博物館編 有隣堂 昭和五十七年(一九八二)刊がある。
- (5)玉塚栄次郎(初代)「たまづかえいじろう」(一八六〇〜一九二〇)明治・大正の実業家。明治二十四年(一九一〇)に株式売買業玉塚商店を開業した。また、天保銭会を設立し、雑誌『天保銭主義』を発行して貯蓄を説いた。商店名を入れたマツチ箱の配布や、公共施設や寺社に商店名を入れた時計や椅子、茶碗を寄付するなど、広告宣伝の魁でもあった。
- (6)尾高惇忠「おだかあつただ」(一八三〇〜一九〇二)幼名新五郎、号藍香。下手計村(深谷市)生まれの実業家・農村指導者。渋沢栄一に招かれ、富岡製糸場の初代場長となった。
- (7)高橋波香「たかはし はこう」(一八三八〜一八九〇)江戸時代末期から明治期の四条派の画家。父波藍と横山華山に画を学ぶ。宮廷画師。

明治期風景銅版画をめぐる(芳賀)

- (8)ブリュナー「ポール・ブリュナー・Paul Brunat」(一八四〇〜一九〇八)フランス人のお雇い外国人。生糸技術者として富岡製糸場の創設に貢献した。
- (9)拙稿「埼玉県における近代県庁文書の編纂と保存―知事官房文書編纂主任の起家から―」『文書館紀要 第十五号』埼玉県立文書館 平成十四年(二〇〇二)刊参照。
- (10)山田衛居「やまだ もりい」(一八四九〜一九〇七)名は致隆、号は朝日能屋、旭舎。幕末・明治の神官。木崎村(現さいたま市)の石田家に生まれ、川越氷川神社の社家山田家に入り宮司となる。幼少より書画に優れ、明治二十六年(一八九三)には、「氷川神社行幸絵巻」を奉納している。日記が、『朝日之舎日記』(川越市立図書館 川越市 昭和五十四年(一九七九)刊)として刊行されており、この中に銅版画の原画作成の経緯が書かれている。
- (11)平山省齋「ひらやま せいさい」(一八一五〜一八九〇)本姓黒岡、名敬忠、字名安民、通称健二郎。三十四歳で幕臣平山源太郎の養子となる。慶応二年外国奉行。明治六年(一八七三)氷川神社の大宮司となり社殿造営を行い、神道大成教を創始した。
- (12)今村興宗「いまむらこうそう」(一八七三〜一九一八)神奈川県生、名は保之助、字は保禄、澄文、我願堂と称する日本画家で、容斎派の日本画を学ぶ。日本画家今村紫紅の兄。人物画に優れる。
- (13)森玄黄斎「もりげんこうさい」(一八〇七〜一八八六)秩父の彫刻師。幼名庄吉、通称権左衛門、諱は金道、広正。竹貫、竹雅、清浄軒、清浄園とも号した。彫刻、画、書に優れ、印籠や根付を得意とした。著書に『印籠譜』がある。
- (14)霜鳥晴「しもとり はる？」精工組・精行舎・精行社の中心的画工。主な号は東涛舎巴凌。日本博覧図』や、全国の寺社境内図の原画・縮図を手掛けた。
- (15)三峰日鑑は、三峰神社への講社登拝記録を始め、山内の様子を社務所が書き綴った日誌。秩父宮記念三峯山博物館収蔵資料。現在翻刻本が逐次刊行されている。当館には、原本のマイクロフィルムを焼き付けた県史C日本(県史CH一五五)がある。
- (16)その後の桑原武吉については、岐阜県の印刷所である西濃印刷株式会社 岐阜県大垣市郭町百五十三番戸)にその名が刷り、「梁川星巖翁附紅蘭女史」(大正十四年(一九二五)刊)や『大垣町全図』を印刷している。
- (17)安田雷洲「やすだらいしゅう」名は尚義、字は信甫、通称貞吉、定吉、茂平。号は、雷洲、雷齋、文華軒、馬城。蘭名はWillelm van Leiden。江戸の銅版画家として、亜欧堂田善と並び、司馬江漢に次ぐ人物であり、蘭学も学んでいた。弘化元年(一八四四)に、銅版画『東海道五十三次揃』を製作している。版画には西洋絵画の影響がみられる。
- (18)三代小室元長(一七六四〜一八五四)江戸時代後期の比企郡番匠村(現ときが

わ町)の医師。産科医、蘭方医。名は長達、克明。号は足羽、如達堂、七器亭。医塾如達堂で多くの医師を育成した。

(19)安藤文沢「あんどうぶんたく」(一八〇七〜一八七二)入間郡阿諏訪村(現毛呂山町)生まれの医師。小室元長の医塾如達堂で学び、江戸に出て四谷で開業、鳥羽藩医となった。「毛呂山町史料集 第2集 安藤文澤」(毛呂山町教育委員会 平成四年(一九九二)刊)・「蘭学事始」(毛呂山町歴史民俗博物館 平成七年(一九九五)刊)参照。

(20)小室家代々の医者、三代小室元長(一七六四〜一八五四)、四代小室元貞(一七八九〜一八五八)、五代小室元長(一八三二〜一八八五)には六十余冊の日記があり、当館の小室家文書に収蔵されている。「都幾川村史資料四」(六)近世編 明覚地区II「小室家日記」(都幾川村 平成十年(一九九八)刊)一四六頁「日記一覧表」参照。

(21)森霞巖「もりかげん」(一八四二〜)名は恭。字は儉讓。南宋画の画家。前橋で師弟を教育した。父東溪は谷文晁に学んだ前橋藩の御抱え絵師。

(22)大槻磐溪「おおつき ばんけい」(一八〇一〜一八七八)名は清崇。江戸時代後期から幕末の漢学者。父は蘭学者大槻玄沢。

(23)新居守村「あらいもりむら」(一八〇八〜一八九三)通称は又左衛門、又三郎。江戸後期から明治時代の群馬の国学者。語学・音韻学を研究し、和歌もよくした。後に、神職を勤める。

(24)文政年間に仙台藩儒学者舟山万年が『塩松勝譜』で挙げた「四大観」は、東の大高森の壮観、西の扇谷の幽観、南の多聞山の偉観、北の富山の麗観である。

(25)古梁紹岷「こりょうしやうみん」(一七五三〜一八三九)江戸後期の禅僧、漢詩人。号は南山、山庵。詩文書画をよくした。仙台瑞鳳寺住持。

(26)油井牧山「ゆいぼくさん」(一七九九〜一八六二)仙台藩校養賢堂教授。漢詩人。27)ベルツ「エルヴィン・フォン・ベルツ」(Erwin von Balz) (一八四九〜一九一三)プロイセン生まれの医師。明治九年(一八七六)にお雇い外国人として東京医学校の教師に招かれる。日本の温泉を愛し、草津温泉を世界に知らしめた。「日本鉱泉論」、『ベルツの日記』等の著書がある。

(28)アルウィン「ロバート・W・アルウィン」(Robert W. Irwin) 明治二十六年(一八九三)まで続いたハワイ王国の中代理公使。日本・ハワイ移民協約を実現した。明治中期に建てられた伊香保温泉の別邸は、旧ハワイ公使別邸として保存・公開されている。

(29)「木曾八景」掛橋朝霧「朝日影匂へる峯ハ猶晴て谷よりかすむ木曾のかけはし」小野瀑布「名にたてる木曾の麻衣をせならて雲井にさらせ瀧のしらいと」横川秋月「秋ふかき高根のみちを分過てよ川にすめる月そさやけき、「御嶽暮雪」信濃路やむかわぬ不二のおもかけもこゝにミタけの雪の夕はえ、「風越晴嵐」吹くもまたあらしやよききたへだへに雲はれ残る 風越峯「寢覚夜

雨」七とせのあとやおもふたれかまたねさめめの床の雨の夜すから、「德音晚鐘」遠近ハ聞もさためぬ山風のさそふまゝなる入相のかね、「駒嶽夕照」おしめ入日も山の名にしおふひきゆく駒の過る光りをが添えられている。

(30)佐々貴醒夢「ささきせいむ」(一九二二)佐々貴醒夢が明治三十一年(一八九八)十月に刊行した「大日本帝国武陽池上本門寺全図」には、発行印刷人として、「東京府下日暮里村字金杉百四拾三地 平民 佐々貴醒夢」とある。他の作品には、「明治座会場式真景」等がある。佐々貴敬氏刊行の『不屈画集』には、「一九二二年(大正十年)、醒夢死去」とある。

(31)浅井忠「あさいちゆう」(一八五六〜一九〇七)明治の洋画家。号は黙語、木魚。フォンターネジに学び、写実的な画風の洋画を描いた。明治二十二年(一八八九)、明治美術会の創設に参加。明治三十一年(一八九八)、東京美術学校(現在の東京芸術大学)の教授となる。明治三十三年(一九〇〇)フランスへ留学。帰国後、京都高等工芸学校教授となる。聖護院洋画研究所を設立、教育者としても貢献した。

(32)小山正太郎「こやましようたろう」(一八五七〜一九二六)長岡藩医の家に生まれた。川上冬崖の画塾で水彩を学び、明治七年(一八七四)に陸軍士官学校図画教授掛、工部美術学校でフォンターネジに学ぶ。明治十一年(一八七八)十一会を結成。東京師範学校教員となり図画教育の普及に尽力する。明治二十二年(一八九〇)明治美術会を創設。不同舎を主宰。重厚な画風で知られる。

(33)五姓田芳柳(二世)「ごせだほうりゆうにせい」(一八六四〜一九四三)下総国猿島郡杏掛村(現坂東市)生まれ。旧姓倉持。本名子之吉、通称芳雄。洋画家初代五姓田芳柳の養嗣子となる。明治二十年(一八八七)に初代から号を譲られ、二世五姓田芳柳となる。明治美術会の創設に参加。歴史画に優れ、聖徳記念絵画館の考証画や、『明治天皇紀』の附図を描いた。

(34)印藤真桶「いんどうまたて」(一八六一〜一九一四)旧姓千葉。明治・大正の洋画家。川上冬崖、フォンターネジに学ぶ。明治十一年(一八七八)、小山正太郎と十一会を結成。私塾丹青を開く。

(35)小林清親「こばやしきよちか」(一八四七〜一九一五)方円舎、真生、真生楼と号する明治の浮世絵師。「光線画」と称する新しい洋風木版風景画を出版した。その後、ボンチ絵や肉筆浮世絵を描いた。

(36)合田清「うたきよし」(一八六二〜一九三八)旧姓田島。明治十三年(一八八〇)に農学研究を志し渡仏したが、同宿の山本芳翠のすすめでパリのバルバン工房で木口彫(西洋木版)を学ぶ。明治二十年(一八八七)に帰国し、芳翠と生巧館を開設して木口彫を教え、また教科書や新聞の挿絵の版下製作を行った。

(37)小口木版は木口彫、板目彫ともいい、木口を版面とした版木に彫刻するこ

と。版面の木材が堅く緻密な為細かい線も綺麗に彫れ、教科書の挿絵等に使われた。

38)金子政次郎は石版印刷人として有名であった。

39)森山天葩は『帝國読本』本文中の挿絵も刻している。森山天葩の作品を含む本は、志賀重昂著『日本風景論』(政教社 明治二十七年(一八九四)刊)、鷹田其石著『中等教科新撰毛筆画帖』(富山房 明治三十年(一八九七)刊)等。

40)『明治期銅版画東京博覧図』(東京商工博覧絵一「東京名家繁昌図録」一東京盛岡図録)全三巻 湘南堂書店 昭和六十二年(一九八七)刊の『東京商工博覧絵』は、『東京商工博覧絵 第二編』の復刻であるが、その巻頭部分に、編者深満池源治郎が記した「東京商工博覧絵第一編成并規約」が掲載されている。

41)『東京の印刷組合百年史』(東京都印刷工業組合 平成三年(一九九一)刊)に印刷組合関係の代表的な史料が採録されている。辞任届は未採録である。

42)以下は姓名から類推した仮説である。①明治三十二年十二月に青山豊太郎が何らかの理由で、実弟の青山瀧三郎(豊太郎が長男、瀧三郎が三男?)に精行社の業務を譲った。②明治三十六年頃迄は、出版者名に「青山豊太郎」と記していた。③青山豊太郎の没年と関わるのかは不明である。④青山麟太郎(青山豊太郎の長男?)が、秋合の後、一時期、精行社代表となった。

43)伊東桂洲(いとうけいしゅう)名は明德、通称信平、字明卿、号桂洲、天香菊逸。幕末から明治の書家であり漢学者。落款は、藤信平印、桂洲漁長。

44)久永其顛(ひさながきえい)多三郎。明治の書家。行書活字の版下を書く。『楷書千字文』(求光閣 明治二十六年(一八九三)刊)がある。

45)長三洲(ちやうさんしゅう)(一八三三〜一八九五)豊後国日田郡馬原村(現日田市)の儒家長海外の子に生まれ、上京して広瀬淡窓に学ぶ。勤皇の志士として活躍し、戊辰戦争を戦った。明治五年(一八七二)に文部官僚となり、広瀬淡窓の咸宜園の学制を基に学制起草し、近代教育の礎を築いた。また、近代学校教育に習字を位置づけた。書・画・篆刻に優れ、漢字の知識も深かった。先述の『明治十四年二月改東京大家大見立儒詩文書画一覽表』

(図64)(川田氏収集 三二五)でも、書家の筆頭に挙げられている。

46)角田真平(つのだしんぺい)(一八五七〜一九一九)号は竹冷、聴雨齋。駿河出身。東京府議員、東京市参事を経て、明治二十五年(一八九二)衆議院議員。俳人でもあり、尾崎紅葉、巖谷小波などが参加する秋声会を主宰。

『聴雨窓俳話』、『俳書解題』などの著書がある。古俳書『竹冷文庫』を東大に寄贈。

47)金井之恭(かないゆきやす)(一八三三〜一九〇七)字は子誠、通称五郎、号は金洞 梧樓、錦鶏。上野国佐位郡島村(現伊勢崎市)の画家金井鳥州の三

男。幕末の志士。朝廷方に組したとして幕府に捕えられたが、維新後新政府に仕え、内閣書記官、元老院議員、貴族院議員。書道をよくし、明治三十五年(一九〇二)に書道団体「六書協会」を設立。

48)鴻巣の長島書店は盛化堂として出版も行っていた。青木忠雄著「埼玉における明治期出版活動覚書(一) 鴻巣「盛化堂」の展開」『埼玉史談 第四十二巻 第四号』埼玉郷土文化会 平成八年(一九九六)二月刊)に、明治十六年(一八八三)五月の『盛化堂蔵版目録』が掲載されている。明治期に教科書を多数出版しており、埼玉県官川島棟坪を始め、書家伊藤桂洲の教科書なども出版した。

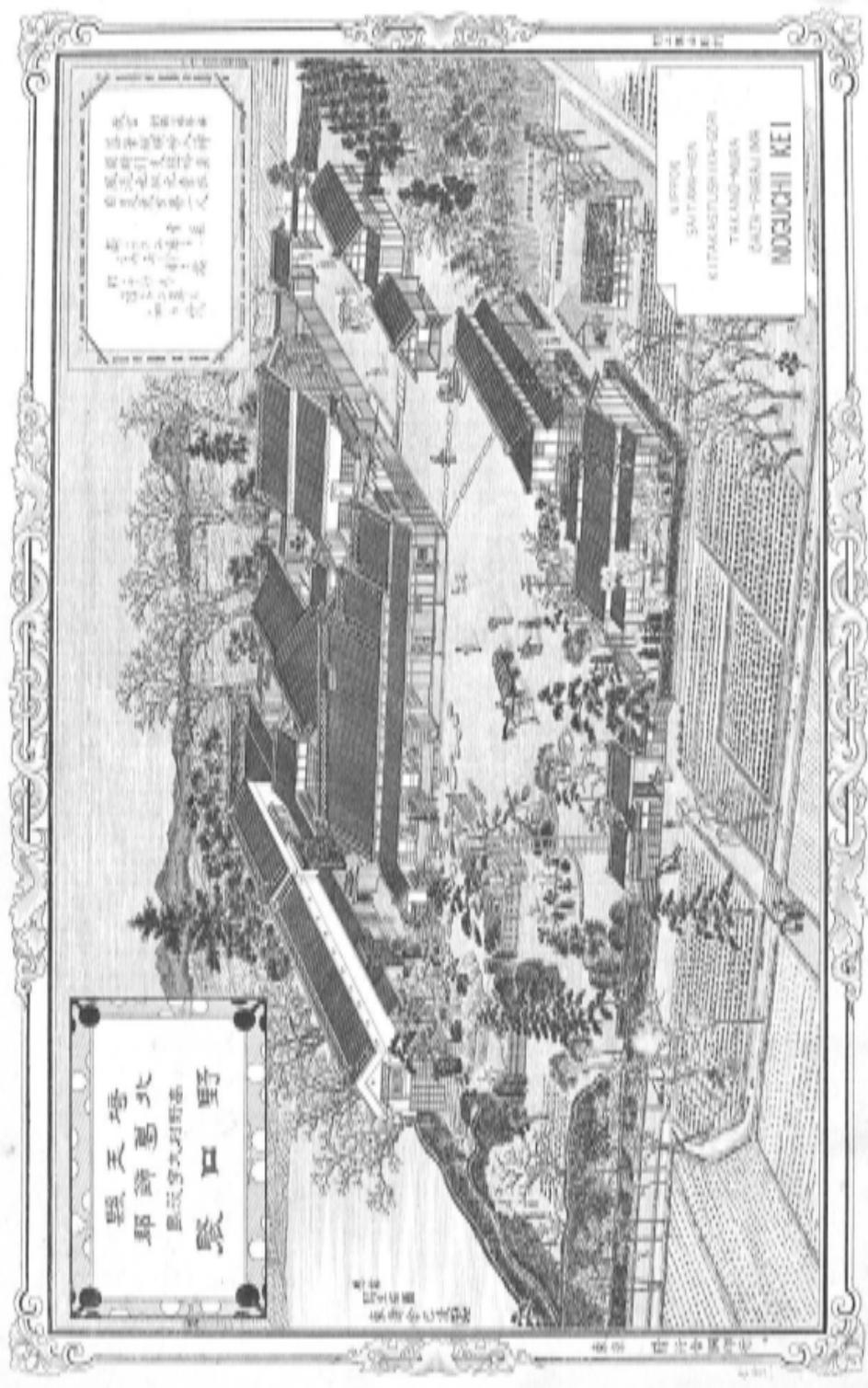
49)大鳥圭介「おおとりけいすけ」(一八三三〜一九一一)日本の西洋軍事学者、幕臣、外交官。中島意庵に医学を学び、旗本となる。五稜閣開城後投獄され、特赦により出獄。その後明治政府に仕えた。工部美術学校校長、元老院議員、学習院長を勤め、清国・朝鮮公使、枢密顧問官などを歴任した。大鳥の題字のある『日本博覧図 第拾編』が刊行された明治二十七年(一八九四)十二月には、大鳥の著書『長城遊記』(丸善株式会社書店)も出版されている。

50)東久世通禧(ひがしくぜみちとみ)号は竹亭、古帆軒。幕末期の尊王攘夷派の公家、明治時代の政治家。横浜裁判所総督、開拓長官、侍従長を勤め、明治四年に岩倉使節団に随行。明治二十一年(一八八八)枢密顧問官、二十三年(一八九〇)貴族院副議長、明治二十五年(一八九二)から枢密院副議長を務める。明治二十六年(一八九三)十一月に『尋常小学修身書』(国光社図書部)を刊行。

51)佐野常民(そのつねたみ)(一八二三〜一九〇二)幼名麟三郎、佐賀藩士。蘭学、医学、造船術を学ぶ。パリ、ウィーンの万国博覧会に参加し、赤十字社を知る。明治十年(一九七七)の西南の役を機に創設した博愛社は、十年後、日本赤十字社となり、佐野は初代社長に就任。大藏卿、元老院議長などを歴任。一方で、日本美術協会の前身である龍池会を結成し会長を勤め、芸術家の保護育成にも尽力した。

52)橋本雅邦(はしもと がほう)(一八三五〜一九〇八)日本画家。幼名千太郎、後長橋、号勝園雅邦。東京美術学校教授を経て、日本美術院青年絵画研究会を指導。橋本家が川越藩主松平家に仕えた関係で、川越出身者と画宝会を結成した。

53)画宝会については、藤島幸彦氏「近代前期における文化会の興隆―川越の画宝会をめぐる―」『埼玉県史研究 第二十一号』埼玉県 昭和六十三年(一九八八)刊、小泉功氏「橋本雅邦「画宝会席画筆記附原一」記録について」『埼玉史談 第五十巻 第四号』(埼玉県郷土文化会 平成十六年(二〇〇四)刊)参照。



埼玉県北葛飾郡高野村大字茨島野口製 東涛舎巴凌写生縮図 村上煤山彫刻 『大日本博覧図』[第7編]・『日本博覧図 第拾編』所収(個人蔵)  
 (収蔵資料(伴田氏収集7307)が化粧断ちされているため、個人蔵の資料の写真を掲載した。)